
踊る葬儀屋

ルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
踊る葬儀屋

【コード】
N0049K

【作者名】
ルト

【あらすじ】
葬儀屋の少女、舞はこの世に未練を残した死霊たちを被うことが仕事だ。そんな彼女の所属する葬儀屋に、今日も依頼が舞い込んでくる。呪い、祟り、怨む死霊と踊るダーク・アクションの舞踏会。

1st program オドリオドル

ざわざわと木々がさざめいている。

夜も深まった深夜二時過ぎ。

ひと気の全くない林の中をひとりの黒い少女が駆けていた。その後を追うように、白いもやのような影が飛ぶ。

少女はツインテールに縛った髪を鬱陶しそうに左手で払いのけながら肩越しに後ろの影を窺いつつ、器用に木をかわしながら走る。

蹴った腐葉土が湿った音を立てて落ちた。

少女は黒いパンツスーツに黒ネクタイ 喪服を身にまとい、そして彼女の右手には、時代錯誤にも身長を超える長さを持つ槍が握られていた。

木をかわし、ずるりと滑る腐葉土を踏みしめて走る。

槍の穂先には、朱墨の繋げ字で文字らしきものが書かれた札が貼り付けてあった。

少女を追う影は木にぶつかってもわずかに一部が煙の散るよう広がるだけで、なにかに吸い寄せられているかのように再びまともって彼女を追う。

「よし」

駆け抜けていた少女は不意に足を止めた。踏ん張っても足元の土がすべり、数十センチ近く動いてから体の動きが止まる。

バランスを崩すことなく立っていた彼女は振り返って、自分を追う白い影を睨む。両手は槍に掛けられている。

影は動きが止めたのを好機とばかりに、真っ直ぐに少女に向かっていった。

「っし！」

少女は、その影を薙いだ。

振り返った動きに乗せて引き絞った槍を大きく振るって影を横一線に薙ぎ払ったのだ。

木に当たって散らされてもすぐにまた収束していた影は、少女の槍に吹き散らされてももとに戻らなかった。音もなく、そのまま宙に溶けるように消えていく。

少女は煙の消えるさまを見つめ、余韻の残る夜闇の林に槍を突き立てた。

「……冥福を」

白い煙が夜の空気に浮き上がる。街灯に照らされてほの青く輝くもやのようなその煙は、風もない夜に静かに溶けるように消えていく。

真夜中のひと気の全くない道端に一台の黒い車が停まっていた。林を前にしてその車に背中を預けて立っている黒い男は、煙が消えたのを見届ける。黒スーツに黒ネクタイ、喪服に身を包む男は、再び口に煙草をくわえた。赤く鈍い光が強まり、白い筒を侵食するように灰が増えていく。

「中野、また煙草吸ってるの？」

「……舞」

林から槍を肩に抱えた舞が歩いてきて、呆れた声を中野に放った。煙草をくわえたまま煙を吐き、舞を振り返る。

「終わったのか」

「ええ。別にたかだか恨みを持って死んだだけの男に苦戦なんてしないわよ」

舞は答えながら長い車体の後ろに回る。

中野はその姿を目で追って、煙草をくわえた口の端がつりあがった。

「その割には時間が掛かってたみたいだが？」

「林の中じゃ長物は振れないから」

舞はむきになったように語気を強めて答える。車の後ろを開き、長い槍を中へ放り込んだ。すぐに扉をボタンと閉める。

中野は車が揺れるのを見て眉をひそめ、今度は車の 前部に歩いていく舞を見る。

「あんまり乱暴に扱うなよ、バチが当たるぞ」

「よく言うわ」

その言葉を舞は鼻で笑った。

助手席の扉を開いて乗り込みながら、心底馬鹿にした口調で言う。

「こんな“霊枢車”を武器庫に使ってる時点で十分バチ当たりですよ」

中野はそれを聞いて、ポケットから携帯灰皿を取り出した。右手だけで器用に開き、煙草を押し込んで火をもみ消す。

「……ま、そうなんだけどな」

肩をすくめて扉を開き、運転席に乗り込んだ。エンジンを回し、

法定速度を守りながら夜闇を走っていく。

林は音もなく夜に沈み、凧いだ湖面のような夜空に浮かぶ月が街を見下ろしている。

1st program オドリオドル(後書き)

ダークでパンクなキレたアクションが書きたい！

そう思って書き始めて書き上げました。霊柩車かつこいいぜ！

ツインテールとか槍とか霊柩車とか死霊とか葬儀屋とか、九分九厘私の趣味で出来ております。テーマ？ そんなもん知らんよ。

なお、続きます。

2nd / program ネガイネガウ

貧相な事務所がある。

駅前の路地を少し行ったところにある雑居ビルの二階にあり、窓には一枚ずつ葬儀屋と書いてありその次に電話番号が二枚かけて書いてある。

雑居ビルが古びていて、大きい駅ビルの陰になっていてすぐ前の道まで歩いてこないと看板が見えない。

室内もまた雑然としていて、応接用のソファのすぐ隣に執務用のデスクがあり、ファイルが積み重ねられている。

ソファ隣のデスクはまだいいほうで、その対面のデスクは資料が大量に積み重ねられている。

押しのけられてグシャグシャになったものもあり、事務ができるとは思えないが、実はギリギリで小型のノートパソコンを置くだけのスペースは確保してある。

そのまた奥にある場所の隔てられた所長の机は最悪で、机の周りに紙束が散らかされていて、机から手の届く距離の壁際に置いてあるダンボールには山盛り一杯の不要な資料が詰め込まれていた。誰も処分してくれないらしい。

所長らしき童顔の男は今も大量の資料の山と格闘している。

黒染みのある壁や天井は掃除する努力はされているが、頑固な汚れに敗北を喫している。

給湯室は丸見えで、インスタントコーヒーを入れている女性はおろか、年代物の冷蔵庫を構えるキッチンまで見えている。

洗いカゴを見るにつけ、従業員は食事をこの事務所で取っているらしい。

葬儀屋の事務所だった。

「こんにちはー」

十回に一回は空回りするそろそろ怪しい事務所のドアノブを開けて、高校の制服姿の舞が入ってきた。

その声を聞いた所長は顔を上げるが、目の前には積み重ねられた紙束があるせいで入ってきた人物の顔を見ることは出来ない。

「あー舞ちゃんかなーこんにちはー」

「また溜まつてるんですか、大変ですねえ」

疲れていて間延びした声になる所長の様子を見ても舞は欠片も気を動揺させずに他人事のように言葉を返した。

所長の仕事は下っ端のうえにも下っ端である舞に降りかかってくることはありえないので事実他人事ではあるのだが、その無情な言葉に所長は紙束の向こうでどんな顔を浮かべているのか知れない。

コーヒーを持ってデスクに戻っている女性は舞と顔を合わせるとニツコリと微笑んだ。

「舞ちゃんこんにちは」

「米原さん、こんにちは」

挨拶に頷いた米原はコーヒーを机に置いて、あ、と声を上げて舞を振り返った。

「ねえ舞ちゃん」

「中野なら表で煙草吸ってましたよ」

給湯室に歩いて行っている舞は振り返ることすらせず言葉返した。米原は困ったように笑う。

「ごめんねえ、いつも同じこと聞いちゃって」

「いえ。同じこと聞かなきゃいけない阿呆がいけないんです」

「お疲れーす」

舞がそう答えた直後に事務所の扉が開いて、話題の人物が入ってきた。

米原と舞は振り返って中野を見て、それぞれ嬉しそうな笑顔と馬鹿にしたような顔を浮かべた。

「噂をすれば影？」

「学習能力は皆無じゃなかったみたいね」

「な、なんですか？　なんかこう、はいつてきた途端にそんなこと言われるとそこはかたなくバカにされた感じがして嫌なんですけど」

中野は女性二人に視線を浴びせられてたじろぎながらも反論する。またもそれぞれおかしそうな親しみのこもった笑みと、くだらないと言わんばかりのしらけた表情が向けられる。

「ふふ、ごめんね」

「事実バカじゃん」

舞の言葉に、ピクリと眉を寄せて青筋を立てる。

「待てコラ舞。お前年下のクセになんでそう敬いという態度がないんだ？」

「あそーごめんあさーせ、老人扱いがお望みなんですねー」

「老人じゃねーよまだ二十代だよー！」

「あつそ、じゃあいいでしょ」
「なんでそう極端なんだよ！ 米原さんから何か言ってくださいよホントこいつは」

米原に話題を振り、視線を向けると同時に二人そろってぎよつとする。

米原が涙を堪えるような表情で無理に微笑もうと眉と頬を痙攣させていた。震える口を開いて懸命に声を平坦に保とうとして失敗しまくっているか細い声を上げる。

「ええ、そうね、二十代は若いわ。三十からはもうオバサンだものね、二十代はいいのよ、まだ若くって」

色々と境目の年齢を迎えて極めて複雑で不安定な女性の禁忌に迂闊に触れたらしく、思春期もビツクリな情緒不安定を発露させた。二人は慌てて米原に駆け寄ってフォローを試みる。

「いや、米原さんは若くて綺麗ですから！ 全然もう！ はい！ 街行く人に聞いたら十人中十人がお姉さんって呼ぶに決まっていますよ！」

「そ、そう！ それに大事なのは心の若々しさっすから！ 米原さんなら完璧ですよ、ええ！」
「い……いいのよ、そんな無理に励まそうとしなくて」

米原は無理にぎこちない笑みを浮かべる。

ここでフォローを拒否されてしまったのは元も子もないが、嘘でも褒められたら嬉しいものだ。少し励まされているようで顔に生気が戻っている。

舞は最後の一押しをしてブンブンと首を何度も頷かせる。

「本心です！ ね！？」

「お、おう、もちろん！ 心の底からマジで本当にそう思ってます！ 米原さんファンクラブ一号の俺が言うんだから間違いありません！」

「ありがと……ふふ、なんだかこんなに褒められちゃって、お姉さん恥ずかしいわ」

二人に畳み掛けられて米原は少し照れたようにコーヒーを飲んで誤魔化すが、その一言には女性としての自負が見え隠れしていた。それを確認して揃って安堵のため息をつく。

ほぼ同時に振り返って給湯室へ歩きだす。

「あんたバカじゃないの？ 余計なことやって」

「スマン。いや、でも元はと言えばお前が」

「だいたいあんた何よ米原さんファンクラブって、あつたまわる、恥ずかしくないの？」

肘で小突きあいながら小声でののしりあつて、舞が心底呆れた声で尋ねる。中野は腕を組んで首をかしげた。

「いや、確かに死ぬほど恥ずかしかった。なんであんなこと言っちゃまったんだろうな」

舞はあざけるように鼻で笑って足を早めて給湯室のキッチンに立った。

マグを二つ並べてインスタントコーヒーを淹れる。悪いな、と中野が笑うと、三十円、と舞に即答されて閉口した。

背後の事務所に置いてある鳩時計がポーンと音を立てて午後四時を報せる。

「あつ、ああああああつ！！」

所長が吠えた。

舞はコーヒーにシュガースティックを投入する手を止めて、隣にある自分と同じように驚いている顔を見上げる。

「事務処理のストレスで発狂した？」

「かもな」

頷きあつて事務所を覗き込む。米原さんも自分のデスクから所長を見ている。

視線を一身に受ける、紙束に半ば埋もれている所長はというと、鳩時計を見て目を見開いて愕然としていた。

舞が首をかしげてツインテールを揺らしながら尋ねた。

「所長ー、どうかしました？」

「あつ、ちよつと手伝つて！ うわあああああ！」

どざあああと書類の山が崩れる。あーあーあーあー、と言いながら米原さんがすぐにヘルプに行き、舞もちよつと呆れたようなため息をついて手伝いに行く。もちろんここまで来て中野一人残るといふこともなく、全員で片付け始める。

「ごめんという言葉を連続で重ねながら所長がカミングアウトした。

「今日はお客さんが来るんだつたから、片付けないといけなくて」

めずらしー、と小さな声で舞が言って即座に中野に叩かれた。米原も目を丸くして、ちよつと手を止めて所長に尋ねる。

「お客さんですか？ 今日？」

「うん。今日って言うか、予定では四時」

「へー……って、もう四時ですよ!? ちよ、洒落になんない!」

舞が絶叫して大慌てで片付け始める。米原が紙を踏んでずっこけそうになったり、間違えて決済前の書類を処分しそうになったり、急に仕事をドサドサと与えられたシュレッダーがあっけなく詰まったりとすったもんだの末、床の紙束を処分したところで舞が聞きつけた。

「ちよ、もう足音が聞こえてきましたよ!?!」

その宣告を受けて混乱は極限に達する。

「うわあああ、まだ全然机の上片付いてないのにー!」

「せめて、これ、量を減らしましょう! 給湯室の奥のほうに隠しといて!」

「分かってます!」

所長が混乱し、米原が書類の束を中野に手渡し、中野が男手の誇りに掛けて累積した重量物を給湯室まで急いで運ぶ。そこに非情の福音が響いた。

事務所に緊張が走る。所長は米原と目をあわせ、頷きあう。米原は自分のデスクに戻り、制服姿の舞は給湯室に隠れる。先客をもつと奥に行けと蹴った。

「どつぞ」

所長が扉に声をかけて、扉が開く。

入ってきたのは男二人だった。両者ともスーツを着ているが、前に立つ男のほうが堂々としており、上下関係がひと目で理解できた。

上司らしい男が一礼して挨拶し、所長もソツなく返す。

付き従っているだけの部下らしい男は、見るからに沈痛な表情をしていて、死に目を見たばかりの人間らしい雰囲気を出していた。というより、上司が平然とすぎているというべきか。

お互いに自己紹介して、応接用のソファに来客二名が座りその対面に所長が座り、米原さんがお茶を汲む一連の流れを終えて早速本題に入った。

「結論から言いますと、私の病院で抱えていた“葬儀屋”が亡くなったのですが、亡霊となっているようなので払って欲しいのです」

上司のほう、どうやら院長らしい男がそう切り出す。所長は涼しい顔で話を聞くが、給湯室にひそんで話を盗み聞いている中野は顔をしかめた。

「よりもよって同業者の亡霊か……」

「なんかあるの？」

同じく話を聞いている舞が小声で尋ねる。中野は渋い顔のまま首肯する。

「ああ……霊気の強い亡霊は物理的に干渉できるほどの力を持つことは知ってるな？ 呪いとかウラムツラムとか、そういう分かりやすいやつだ」

「葬儀屋はそれが強い傾向にあるー、とか？」

「そういうこと。まあ、霊気の強い亡霊をねじ伏せて祓うのが仕事だからな、自然に強くなってくるもんなんだと思うが」

ふうん、と舞は興味なさそうに頷き、所長たちをうかがう。

中野も肩をすくめて同じく所長たちのほうに意識を向けた。

「連盟から、あなたがたは荒事に関してこの一帯の葬儀屋のなかで抜きん出た実力がある、と聞きまして頼ってきた次第です」

「ええ、間違いありません。受肉してない霊ならほぼ問題なく除霊できます」

「それは心強い」

院長と所長の話の中で聞こえたキーワードに再び顔をしかめる中野。目ざとくそれに気づいた舞は目で尋ねた。

中野は舞の視線に気づき、苦笑して手を振る。

「連盟からの推薦で来たなら、まずもって受けなきゃいけない仕事だから。そういう強制は好きじゃないってだけだ」

ロクな仕事がないのも確かだがな、と続ける言葉を聞いたかどうか、舞は興味をなくして所長たちのほうに意識を戻していた。

所長たちの会話は受けるかどうかというような交渉をすつとばして情報を得るほうに入っている。

「佐藤美由紀は、生前は優しく子供好きで病院でも保育所の手伝いをしていていました。札に霊気を込めて除霊するのが基本でしたね。霊質はこれを参考にしてください。親族のリストはこちらです」

部下のほうがかげかに顔をゆがめた。それに気づかないふりをしながら、差し出されたファイルを眺めて所長は笑う。

「ありがとうございます。手際がいいですね」

「ええ、自分のところで働いていた者が被害を出すなんてことは防ぎたいですから」

院長は顔に皺を作って笑う。

それからは、院長による詳しい説明が続いた。死因は不明だが、特に殺害される理由になるようなものはなく、彼女の変死は不審であること。刑事事件も視野に入れて警察が調査を続けていること。死亡時の状況　一人暮らしの自宅でうつぶせて倒れていたこと　などや、逆に彼女のほうが誰かに恨みを持っていたりはないかということ。

全て白で、彼女の唐突な死は奇妙という他なかった。

しかし、通常通りに行われた彼女の葬儀では彼女の魂魄が確認できなかつたという報告がある。

殺された者や非業の死を遂げた者など、肉体という寄り代を失つてもなお現世に留まるだけの意志と実現する力を持つ場合のみに確認できる事例だ。

元葬儀屋である以上、その霊気を持つてすれば他者を害することは造作もない。どころか、解き放たれた靈魂は生前とは比べられないほどの霊気で世界に干渉する、危険な存在だった。

「……分かりました。あとは私どもが済ませておきましょう。ありがとうございます」

話を一通り聞き終えた所長はそう言っただけで頭を下げた。院長のほうも一礼をしてそれに答える。

「いえ。危険な仕事になりますが、よろしくお願いいたします」

「ははっ。危険、ですか」

拒否されることもある“葬儀屋の葬儀屋への依頼”を受けて、所長は笑った。院長が不思議そうに顔を上げるのを見て、失礼、と頭

を下げる。それでも所長の顔の笑みは消えてはいなかった。

「言ったはずですよ。私どもは受肉していないただの霊なら問題なく除霊できます。ご安心ください」

その断言に、院長はつられたように微笑む。

「それは、心強いですね」

2nd program ネガイネガウ（後書き）

葬儀屋連中、揃い踏み。

というわけで。

続きました。

依頼が来ました。

踊ってません。戦ってません。

ちっ。

ストーリーなんて飾りです、偉い人にはソレが分かんのです。

「で、そのホシは？ さつさと始末するんでしょ？」

客の帰った事務所で、舞が身も蓋もない物言いで切り出した。

所長は苦笑を浮かべながらも頷き、霊質を知るための媒介、今回は故人の頭髪を手にする。目を伏せて数秒ほど黙祷を捧げると、すぐに目を開いて米原に放り投げた。

「米原さん、お願い」

「ええ、お任せ」

米原は頭髪を受け取ってウィンクすると、体を翻して事務所の外に向かう。

それを見送って、中野がつぶやいた。

「米原さんはすごいな。霊質を見るだけでなく、類感で場所まで探るのはなかなか出来ないぞ」

はっ、と鼻で笑って、ソファに腰掛けて足まで乗せる舞がそっけなく言い返す。

「あんたの腕が足りないだけじゃないの？」

「否定はしない」

あっさりと認めた。

所長は自分のデスクで渡されたファイル類に目を通しながら二人に声をかける。

「ほら、二人とも準備を始めといて。見つかったらすぐに始めるんだからさ」

「まだ時間掛かるでしょう。今五時だから、夜まで掛かるんじゃないですか？」

舞はソファの肘掛にもたれるだらけた姿勢で反論した。所長は少し笑って首を振った。

「強い霊だからすぐ見つかるだろうし、街中で被害出されたら最悪だ。騒ぎになることを覚悟してでも飛び込みで除霊しなきゃいけないかもしれない」

うげ、と舞は舌を出す。自分の高校の制服を見下ろして改めて顔をしかめた。

「街でなんて立ち回りたくないなあ。噂になったらどうすんのよ」

「仕事なんだから仕方ないだろ」

「葬儀屋なんて無免許の仕事で威張ってみてもね、説得力つてものがないわ」

「……まあ、そうなんだけどな」

手をひらひら振りながらの舞の言葉に反論できない中野はつぶやいた。

うだうだ言い合っている二人に所長が少し声を大きくする。

「いいから準備始めなさい！」

「はい」

舞は返事をしてひらりとソファから起き上がり、事務所から外に出た。

向かいの部屋も葬儀屋が借りてる部屋で、女子更衣室と神域を兼用している。神域といっても神棚を 中心に注連縄でくくって結界を作っているくらいのもので、特別たいした意味はない。

更衣室の扉を開くと、米原が着替えを終えて支度を始めているところだった。

塩と神酒を持っている巫女服姿の米原は、舞と目を合わせると微笑む。

「あら、もう準備を始めるの？」

「はい、所長がはりきっちゃって」

舞が笑って言うと米原も少しおかしそくに笑って、場の清めを続ける。舞も米原に背を向けて、ロッカーを開いて中の服を戸の裏につけているフックに掛ける。黒いパンツスーツに黒いネクタイ。喪服^{とぶく}。

制服のブレザーを脱いだ。続いてブラウスも手際よくボタンを外し、一気に脱ぐ。

ロッカーに貼り付けられた鏡に舞の姿が映る。

上半身にブラを残してあらわになった肌の、へその少し横に十センチ弱ほどの縦に裂けたような傷跡があった。

その傷跡を人差し指でゆっくり撫でて、目を伏せる。

目を開く。すぐに喪服を手にとって、羽織る動作と同時に袖を通す。右腕も通し、慣れた手つきで前を留めていく。スカートのホックを外して下ろし、ボトムスを履き、ジャケットを着る。ものの数分で着替えを終えた。

制服を折りたたんで喪服を掛けていたハンガーに掛け、ロッカーに戻す。そしてブレザーのポケットを探り当てて鍵束を取り出した。

「米原さん、横失礼します」

「はい、どうぞ」

声をかけて注連縄の横を歩いて、奥にある南京錠の掛かっている大きいロッカーの前に立つ。

頑丈なつくりはロッカーというよりも金庫に近い。

鍵束からひとつの鍵を取って持ち上げた。その他の鍵が金輪の下に滑り落ちて音を立てる。

つまんだ鍵を南京錠に差し、ひねる。
がちん。

音を立てて錠前は外れた。もう一つ鍵を探り当て、ロッカーに備えている鍵を開ける。がちん。

手を掛けて、ロッカーを開いた。

中には大雑把に布に巻かれた長物が立てかけられている。舞の身長より長い。

舞は開いた戸に手を掛けたまま、静かにその長物を見つめる。
微笑んだ。

「よし」

長物をつかみ、ロッカーから取り出す。自分の肩に立てかけてロッカーを閉め、元通り二つの鍵を掛ける。

鍵束を手でくるりと回し、内ポケットに突っ込んだ。

外から鍵の入った場所を手のひらで叩き、感触を確認する。頷いた。

「準備完了」

振り返って米原を窺う。

米原も場の清めが終わってよいよ儀式に入ろうところだった。榊の枝を持って神棚に祈りを捧げている。

舞は邪魔にならないように足音を忍ばせて更衣室を出た。

事務所に戻ると、ジャケットを着ていないだけで支度を終えている中野がソファに座ろうとしている。

「せいっ」

そのケツを手に持っている長物で叩いて座らせず、代わりに滑り込むようにソファに足まで乗せて座り込んだ。

叩かれたケツをさすりながら顔をしかめて舞を見下ろす。

「いつて、お前、わざわざ横取りすることあねーだろ。だいたい二人掛けなんだから……足どける」

「やーだよ」

舞は笑いながら長物を抱え込み、中野に向かって舌を出す。

まだファイルに目を通していた所長が苦笑して二人を見た。

「いつも思うけど、随分余裕だよな」

舞と中野はそれぞれ所長を見返した後、少し笑って肩をすくめた。舞は自分の抱える長物を軽く叩いてみせる。

「まあ、葬儀屋の仕事と言っても”こっち”のほうなら私の得意分野ですからね」

「そんで俺はコイツを運ぶだけっすからね」

中野はソファに寝転がる舞を指差してにへらと笑った。

舞は自分が指差されてるのを見て、中野の足を長物で軽く叩く。

「いてっ、スネに当てるんじゃないやねえ！ いてえだろ！」

「はいはいごめんごめん、それよりコーヒー淹れて来てよ」

「頼むなら普通に頼めよ……」

ぼやきながらも給湯室に向かう中野を見て、満足げに笑う舞。そんな二人を見て所長は苦笑を濃くする。

「うわっ、いけね、忘れてた！俺たちコーヒー淹れてたんじゃん！うわあ、もったいねえ」

給湯室のほうから中野の悲鳴が響く。

舞は体を起こし背もたれに顎を乗せて、給湯室で洗面を浮かべながら冷めたコーヒーを飲み下している中野を見やる。

「あー。そっか、客が来るって片付け始める前にコーヒー淹れてたんだっけ」

「そーそ、すっかり忘れてたな。舞もコレ飲め、勿体無いから」
「嫌だ、バカ。淹れなおしてよ」

緊張感の欠片もないやり取りを続け、コーヒーも飲み終えて夕食は誰が作るかという話が脱線して酢豚にパイナップルはありかなしかになり、それがまた脱線して目玉焼きの味付けは何かになり、一周回って舞が夕食を作ることになったころ、事務所の扉が開いた。

「佐藤美由紀さん、見つかりましたよ」

巫女服姿の米原が、微笑む。

よしきた、と舞がソファから飛び上がるように立ち上がり、長物で中野の後頭部を殴打した。

「いって！なにすんだコラ舞！」

「ボーっとしてるから。米原さんへいパス！」

後頭部を押さえる中野を尻目に長物を肩に乗せて米原に駆け寄りながら手を出す。

米原はおかしそうに笑って、印をつけた地図を舞にパスする。

中野は舞の後姿に手を伸ばしながらも、丸めた地図をへっぴり腰で両手パスする米原に目を向けたままで叫ぶ。

「ちょっと待てよ、巫女姿の米原さんレアなんだぞ、もう少し拝んだっていいだろ！」

扉の前で振り返って長物を半身に構える。

「ほらほらバカ言ってるともう一発いくよ？」

「あーもうこそ、待てよ舞っ」

わずかな葛藤を乗り越えて、イスに掛けてあつたジャケットをひたたくるように取って中野も走り出す。舞はそれを見越して身を翻して先に事務所から出て行った。

扉の脇にどいていた米原は穏やかに微笑んで「いつてらっしゅい」と中野に手を振る。すれ違いざまに中野は手を上げて答え、扉を閉めながらターンを決めて事務所を後にした。

地下にある駐車場まで階段を駆け下りると、すでに舞は長物を霊柩車のなかに放り込んだあどだった。

助手席の扉を開いて乗り込もうとしているところに駆け寄り、鍵を開けて運転席に滑り込む。

「場所は？」

「えーっと、ちょっと待ってー？」

キーを回してエンジンをかけながら尋ねる。

助手席でガサガサと地図を開く音とエンジンの震える音が重なる。地図に目を落とした舞がまず大雑把に場所を口にする。

「山？ 二丁目の裏手の山だね」

「へっ、そいつは好都合」

「誰にとつてもね」

ギアを変えながら中野が笑い、舞が微笑んで後に続く。

アクセルを踏み込んで、葬儀屋の霊柩車は走り出した。ミラーに吊り下げられた交通安全のお守りが揺れる。

街中を霊柩車が走るなど縁起の悪いこと甚だしい。そのため中野は人通り車通りの少ない道を選んで走る必要があった。

現在時刻や信号待ちの車の数、道路工事の有無などをもとに目的地までの距離と人通りを計算して逐一最適なルートを考え出して走る。

迷いのないルート選択に窓の上にある取っ手に捕まりながら舞は笑う。

「さすが、元タクシー運転手。道のことは詳しいね」

「いちいち地図を開いてたら商売にならないからな。あいにく、道を覚えた頃にクビになったが」

どこも不景気だ、とぼやきながら中野はハンドルを回す。

現役学生である舞にはあまり実感のない話だし、興味もない。適当に流して、膝の上の地図に目を落とす。

等高線の流れと地勢を頭の中に描きながら、つぶやく。

「今日の風向きと星、月齢と雲の量からしーたーらー」

声を伸ばすところで目まぐるしく計算しつつ、地図の上を視線が

走る。「ら」の音が完全に「あ」なり、息も三分の二くらい切れてきたところで声を止めた。

一度深呼吸してから地図の山の一点を指差す。

「靈氣が定着しやすいのはこの辺じゃない？」

「ん……了解」

信号待ちの隙に舞の指差す場所を覗き込んで確認し、中野は目的地までのルートを最適化していく。幸い、ひと気が少ない時間に住宅街を突っ切ることが出来そうだ。霊枢車が通れそうな幅の道はいくつあったか。どう組み合わせれば最短で着けるだろうか。

集中するあまり強い笑みが浮かんでいることに中野は気づいていない。

ややもするとその山が見えてくる。カーブに振り回されながら、舞は目を細めて山を見た。

米原のように遠い場所の靈氣を感じ取るような器用な真似はできないが、肉眼で確認できる距離まで来れば舞にも靈氣を探ることができる。

人の目が錯覚を起こすように、舞の目もまた精度はいま少しだが、それを補うために身につけた知識と掛け合わせて考えれば十分見分けることが出来る。

だから、

「いるね」

「そうかい、そらめでたい」

目を細めてつぶやく舞に即座に返す。ハンドルを切ってまた角を曲がり、住宅地を抜けていく。山を正面に見据えて、かなり近くなってくる。

中野もわずかに眉間にしわを寄せた。

「ここまで近付くと、靈感のない俺でも分かるな」

「靈気がただ漏れてるからね。ずいぶん優秀だったのかな」

「さてな」

ゆっくりと減速させて山の手前で車を止める。

舞は扉を開けてすぐに外に出た。扉を閉める舞と窓越しに目をあわせ、中野は笑みを抑えて言う。

「気いつけてな」

「うん」

からかわずに頷き、小走りで霊枢車の後ろに回った。

扉を開けて長物を取り出し、巻きつけている布を解く。ほど

するりと衣擦れの音とともに姿を現すのは、穂先に朱墨で文字の書かれた槍だ。布を車の中に放り込んで閉める。

槍を肩に担ぎ、鋭く一息吐いて気合を入れて、舞は山へ向かって駆け出した。

「そういえば、この山って誰かの所有地なのかな」

敷居を飛び越えて緩やかな斜面を駆け上がりながらつぶやいた。

「……どうでもいいか」

耳に神経を集中させて、靈気の核が奏でる、音とは微かに違った感覚の共振を探る。

導かれるように走る。

木の根を飛び越え、深い落ち葉を踏みしめて、靈気の濃い場所強い場所へと進んでいく。

すでにそこは異界だった。

解き放たれた霊気が濃密に絡みつくような。御伽噺おとぎばなしで異形の者に
出会うかのような。

常識とはかけ離れたもう一つの現実。

物語の登場人物は、回帰するまで自分がどこに足を踏み入れたの
か気づかない。

木々の間を抜けて、開けた場所に踏み込む。

そこには白いもやのようなものが立ち込めていて、間違いなくそ
こに被うべき魂があった。しかし、舞はそこで足を止めて、目を見
開いた。

言葉が出ない。

異界。

白いもやに包まれている人影が闖入者ちんにゅうしやに、舞に気づいたのか、ゆ
っくりと振り返った。

長い前髪が掛かった顔は、誰のものか判別できない。
人間のものなのかどうかすら。

「……だれ？」

髪の間から口が開いた。口の中の赤がやたら強烈に目に焼きつく。
ぬめった光を放つ瞳が、ぎよろり、と舞を捉えた。

「だあれ？」

体ごとゆっくりと振り返る。霊気が流れて、生ぬるくて底冷えの
する風が吹いた。

女は笑った。

「私を……」

歡喜に。

狂気に、絶望に、悔恨に、復讐に、憎悪に、恋慕に、感嘆に、憤怒に、慈愛に、快樂に、怨嗟に。

「私を殺したのハ、だアレ？」

女は笑う。

3rd program ワライワライ(後書き)

狂気笑い、好きです。

でも、ただ哄笑するだけが狂気笑いじゃないと信じています。こ
だわり。

着替えというサービスシーンや、ぎりぎりお姉さんの巫女服など、
私の趣味がボロボロと出ておりますが、お楽しみいただけただけでしょ
うか。

そして、巫女服は、若い女の子だけのもんじゃない、ということ
がお分かりいただけたでしょうか。

書きたいものを書く、それが私のジャスティス。

4th program クルイクルウ

「っし！」

舞は声になるほど速く鋭い息を吐き、槍を構えた。

山の開けた場所でいびつな丸に切り取られた空から茜の混じる夜の青が見える。

向かいには明らかに普通とは違う女が立っている。ゆらゆらと立つだけで揺らめいている。

戸惑いながらも、場に満ちる霊質と女の霊質が同じものであることを改めて確認する。

「生きている人間が霊気を出すのは、肉体に遮られて不可能。霊気を放出することが出来るのは魂だけ。なら、これは……」

冷や汗が背中を伝い、ゾクリと背を振るわせた。

女の姿をした物の怪を睨み、槍を強く握る。

「……これが、死霊の受肉」

ちらり、と槍の穂先に目を落とした。

直後にがさりと落ち葉のこすれる音がして、顔を上げると目の前に落ちてくる女の笑顔が見えた。

「なっ!?!」

慌てて槍を立てて柄で受ける。ごん、と異様に重い手応えと同時に爆発したように霊気が溢れた。

槍を回して穂先を向けると女は身を翻して距離を取る。ああ見え

ても知性はあるようだ。

悪寒と脂汗が止まらない。じつとりと塗れたブラウスに顔をしかめる。

(……退くか)

受肉した霊と戦うには不足しているものが多すぎた。なにより、舞自身の心構えが出来ていない。この状態では、たとえ”切り札”を使っても勝率は五分といったところ、無駄切りは避けたい。

「ただし、相手が逃がしてくれるかどうか。おっかないもんね」

舞のぼやきが聞こえたのかどうか、女は引き裂けるような笑みを浮かべた。

体を揺らし、蛇のように腕を垂らして駆け寄ってくる。

舞は槍を振り回して周囲の霊気を祓い、半歩引いて半身に構えて待ち受ける。

「ふっ！」

ぎ、と足を滑らせて腕を伸ばし引き絞り、槍を跳ね上げるようにして穂先を女の正中からたたき上げるように突き刺そうとする。しかし女は足だけで跳躍し槍よりも高く飛んでその攻撃をかわした。舞は顔をしかめてそれを見続け、足を滑らせて槍を引き上げる。

「普通じゃないわ、ねっ！」

そのまま円を描くように空中にいる女の胸を一閃するようには穂先を滑らせた。女はわき腹からその穂先を受けて大きく吹き飛ばされる。

重い肉を殴り飛ばす感触に手が痛むのを顔をしかめて我慢しながら舞は構える。

血を引いて墜落し数回跳ねるように転がった女は、土を掻くようにして手を突きすぐに立ち上がる。

げえっ、と顔をゆがめて舞は吐き捨てた。

「映画にあるタチの悪いゾンビみたい」

女のまとうボロ布には切れ目が入っているが、肝心の体に傷はなかった。有り余る霊気と肉体が槍を防いだようだ。

女は口もとに笑みを貼り付けたまま目に怒りの色を浮かべた。野獣のように四肢を地面に叩きつけて跳躍し、襲い掛かってくる。

「野獣というより、山姥やまんばね！」

槍を小さく回して鋭く突く。女は体をひねってその突きをかわし、槍の柄をつかんだ。

舞は顔をゆがめて両手の力を入れなおす。女は不敵に笑って腕の力を増した。一瞬だけ綱引きのように引き合う。

が、

「ああアああアあ！」

大口を開けてあられもなく幼児のような悲鳴を上げて手を離し、飛び退った。舞は槍を引き戻して顔をしかめる。

「私の槍に馴れ馴れしく触らないで」

言っても分かりそうな頭をしてとは思えないし、腕を切り落としてやるうか、とぶつぶつぶやきながら足を少し開き、構えを取

る。

女は目をぎらつかせて舞をうかがっており、背を向けて走り出すと即座に襲われそうだった。

舞は胸のうちで毒づく。

女はさらに飛び掛ってきた。舞は踏み込んで袈裟懸けに切り裂くように穂先を滑らせる。

「っし！」

女は蛇のように体をつねらせひねってその穂先をかわすと、そのまま地面に手を突き側転をするようにして強引に間合いに切り込んできた。

「いっ！？」

瞠目する舞の目の前で立ち上がる女は、獰猛な笑みを浮かべて腕を振るった。

槍を慌てて引き戻そうとするが間に合わない。腕をひねって動きを切り替える。手首のスナップを利かせて強引に持ち上げる。

がん、と異様に重い響きとともに石突が女の腕を弾く。左手の力が抜けて槍から手が離れる。舞の体も大きく傾ぎ、ゆるい斜面を大げさに思えるほど何度も転がって滑り落ちた。

「いったー……つつつ」

舞は立ち上がりつつ左手首の調子を確認する。しびれているだけで感覚はある。折れてもいない。

顔を上げると女が斜面の上から満面の笑みを浮かべて舞を見ていた。

「くっそ、馬鹿にしてくれるわね」

最悪だった。女は動きがこちらに合わせたものになっている。

もとの身体能力も頑健さも受肉した亡霊のほうが強い以上、戦えば戦うだけジリ貧になるばかりだ。ここで槍術としての本気を出しても情報を与えるだけかもしれない。

「やるなら、一撃で決めないと……」

舞が逡巡していると、女が笑って両腕を広げた。怪訝そうに眉をひそめて様子を伺っていると、それを悟って顔色を失う。

女が靈気を操っている。

白いもやが胸の前に集まると、砲弾のようにはじき出された。

舞は横っ飛びに身を投げ出して避ける。

砲弾のような白いもやは地面に当たると、ぼふっと崩壊して着弾点の周りにもやが残る。

かわした舞は、起き上がって頬についた土を払う。

「あんな濃い靈気に当てられたら、正気を失うどころじゃないっての……！」

横目に女を窺う。

またも靈気を集めているのを確認すると、顔を強張らせてクラウチングの姿勢から駆け出した。背後を白い航跡を引いてもやの固まりが通り抜ける。

「もう、背に腹は代えられないって！」

槍を浅く持ち、穂先についた符をひっぺがした。顔を向けて女を見る。

舞に向かつてもやの砲弾が飛んでくるところだった。
目が動く。砲弾の速さに目が追いつき、舞の体は傾いてひねりを加え、腰と腕に力をためる。振り切るための予備動作。

「っし！」

一閃し、砲弾を吹き散らす。もともになる靈気を抜って防いで見せた。

振り切った動作のままかすかに前かがみになり、それをバネにして跳躍する。

「ひゅ！」

斜面を大きく飛び越えて、一足で女のもとまで間合いを詰めた。女の笑みがかすかに強張っているように見えて、舞は笑う。

「せい！」

一転、円を描くように浅く持った槍を振るう。青いもやがその軌跡に沿って三日月のように揺らめいた。

女は槍を避けて大きく後退りしている。舞は即座に地面を踏み、さらに踏み込んだ。その一歩が低空飛行をしているように異様に伸び、女との距離が一定に保たれる。

舞は強く笑った。

「勝負の心得は、自分の間合いから相手を離さないこと！」

滑るように足を腐葉土に食い込ませ、槍を振り上げる。その斬撃が直撃し、女はもんどりうって四つん這いに着地する。

追い討ちを掛けに舞が踏み込む。

横合いから白いもやの塊が突如現れて突っ込んできた。

舞は反射的に腰をひねって槍を突き出し、穂先でそのもやを突き刺して吹き散らす。

そして、女が笑った。

舞は顔を引きつらせて女を見る。女は踊るように手足を動かし、強烈な蹴りを繰り出した。

即応して槍の柄で受ける。衝撃に両腕がしびれ、槍が大きく逸れる。

しかし、女の動きはまだ止まっていなかった。

足は二本ある。

同時に再び繰り出される蹴りが舞の腹を狙って突き出される。

力任せに槍の弾かれたのを押さえ込んで二発目の蹴りも柄で受けるが、ミシミシと槍がきしみ、舞の体は風に吹かれる落ち葉のように吹き飛ぶ。

「ぐう……っ！」

顔をしかめて槍を握ったまま固まる腕を解きほぐす。

そのまま体勢を整えて斜面に着地する。勢いはすぐに止まらず、腐葉土の上を大きく滑る。動きが止まったときに膝が落ちた。

「これは、ヤバイ……かも？」

息が上がってきたのを意識して舞の口に自嘲するような笑みが浮かぶ。

足に力を入れなおして立ち上がる。その場でステップを踏み、ひとりうなずく。

槍を構えなおして女を見据えた。

「さっさと手早く、決めましょう、か！」

言葉と同時に槍を横に振り、飛んできたもやの砲弾を被う。同時に地面を蹴って、女との距離をふたたび詰める。

横殴りに槍を薙ぎ払い、穂先で切り裂くというより叩きつけるように女を狙う。

女が飛び退ってかわすと、握る手を滑らせて浅く持ち、素早く足を踏み変えて突く。女をかすめるが、今度は血も出ず、ジュツという音とともに白煙が昇る。

「っひゅー！」

片足を引き、逆袈裟に槍を引き上げる。脇から肩を切りつけ、再びジュツという音。

女の顔が歪んでいるのを見て、舞は玉の汗が浮かぶ顔を強く微笑ませる。

女の腕が振るわれ、近すぎる間合いから靈気の籠もった拳が襲い掛かってくる。

舞は足を引いて石突で女の腕を逸らし、クルリと槍を一回転させて槍穂の根元を掴んだ。

右腕だけで女の胸に突き立てる。左手を伸ばして槍の柄をつかむ。

「っしー！」

気合一閃。

跳ね上げた槍が女の頭まで切り上げて、穂先が中天を指す。

糸が切れたように女の体は崩れ落ちる。いっばいに開いた口からうわごとのように声が漏れているだけだ。

「これで、終わった、の？」

舞がつぶやきつつ、石突を地面に突いた。とす、と腐葉土の地面に深く刺さる。

荒くなつた息を吐き、深呼吸をする。
そして気づいた。

「……っ、まだ靈気が」

「ああああアアアああアアッ！！」

女の体がぶるぶると震え、人間の口からこれほどまでの音がでるのかというほど大きい音を出して、ずるり、と女の体は動いた。

電気を流すとカエルの足が動くような、極端かつ唐突な動きで女の体が引き絞られる。

バネ人形のような頭突きが叩き込まれた。

どん、と受けた槍を越えて腹まで響くような、あまりにも重い一撃。

槍の柄で受け止めたが、普通に受けていたら内臓が破裂していたかもしれない。

割れた額から血を流しながら、女は舞に背を向けて化け物染みた動きで吹き飛ばすように逃げていった。あつという間に見えなくなる。

突如、山は静けさを取り戻した。

靈気は跡形もなくなり、風に木々がざわめく。

辺りの蹴散らされた土が静かに崩れる。

動物の気配もない。

夜の山の静寂。

当たり前の景色。

舞は力が抜けたように座り込んだ。

「つつ、ええー……」

声が漏れる。

抱えるように構えていた槍が膝の上に落ちた。頭突きを受け止めた両腕の全てが痛む。

女が消えていったほうを見ながら、舞はつぶやいた。

「……なんなの、もう……」

やっとの思いで山から出た舞は、その足で霊枢車へ向かう。

槍を杖のように使いながらときおり力の抜ける足を引きずって道を歩く。

「携帯とか持てればよかったのに……媒介にしてくる霊もいるから持てないのは分かるけどさあ」

震える声で愚痴を言いながらため息を吐いた。まぶたの重くなってきた視界で、舞に気づいた中野が槍を巻いていた布を持って駆け寄ってくるのが見える。

「おい、大丈夫か！ なにがあつた!？」

中野に体を抱えられるのを感じて、舞は力を抜いた。中野の顔は危機感でさらに引きつる。

「最悪……あの霊、受肉してた」

「な」

「好き勝手暴れてさ……どっか逃げられた」

必要最低限の情報を伝え、舞は深く息を吐いた。

中野は強張った顔で舞の手から槍を取り、布で巻き始める。一度

巻かれるのを見るたびに舞のまぶたは下がり、最後には目を閉じて寝息を立てていた。

槍を巻き終えて結んだ中野は、疲れ切った舞の表情を見て眉をしかめ、額を撫で付ける。

「無理してんなよ、バカガキが」

ため息を吐き、舞の体を抱えて立ち上がった。

霊柩車まで運び、舞を抱えたまま器用にドアを開けて助手席にそうつといれる。

槍を後部から積載し、最後に放り投げていた吸いかけの煙草を拾って携帯灰皿に押し込み、運転席に戻った。

車内に置いてある携帯を持ち、事務所に電話を掛ける。

「はい」

「米原さん？ 中野です。舞が札を剥がして倒れました。霊が受肉して、取り逃がしたようです」

伝えるべき情報を一息に伝えた。自分で言いながら、嘘だ、と言いたい気持ちを眉根をきつく寄せることで堪える。

電話口からの返事はすぐには聞こえなかった。

「……そう。一度戻ってきてもらえるかしら」

やがて聞こえてきた米原の声は、落ち着いていた。

中野はその指示に頷き、言葉を重ねる。

「分かりました。米原さんと所長は治療と再走査の準備をお願いします」

「ええ、分かってる。気をつけてね」

米原から電話は切られた。中野は携帯を閉じて放り出し、キーを回してエンジンを始動させる。

ルームミラーで寝入っている舞の顔を見た。

「……くそっ」

毒づき、ハンドルを回す。エンジンのうなりが大きくなる。窓の外の色が流れ始めた。

ルームミラーに吊られた交通安全のお守りが揺れる。

4th program クルイクルウ（後書き）

戦闘です。

やっぱり戦闘ですよね。

以前書いた作品で戦闘シーンが冗長になったものがあるので、今回はザックリアツサリ。

バトルはやっぱり燃える。

華があればなおのこと。
うん。

5th program イヤシヤス

別段大したことはなかった。

米原さんが舞についていた余分な靈気を抜い、簡単な手当てをし、体力回復に努めさせるだけでよかった。靈気に関する事件において、舞に勝る人材はそうそう見つからないだろう。

しかし、だからこそ、舞が勝てなかった靈はほかの誰も戦えない相手ということになり、全ては舞の復活を待つことになる。

朝日がりノリウムの床で反射している病院の廊下を中野は歩いている。向かいから歩いてきた米原から声かけられた。

「中野くん」

「米原さん……舞は？」

「今、目が覚めたわ」

言って、米原は振り返る。中野も視線を同じくして扉の開いている病室を見る。

顔を見合わせて、どちらからともなく歩き出した。

病室のなかは小ざっぱりとしている。やや手狭な角部屋の個室で、一っきりのベッドのうえで舞が体を起こしていた。

いつものツインテールを下ろしているせいか、やけに細く見える。窓から日が差しこみ、ホコリが輝いていた。

「あ、はよっす」

舞は入り口に立つ中野に気づいて、ひらりと手のひらを見せる。

いつも通りの舞の様子に中野は苦笑して、手のひらを見せて返す。

「はよっす」

病室に入り、横の棚にフルーツの缶詰が入ったビニール袋を置きながら中野は尋ねた。

「どうだ、体の調子は」

「問題なし。次の検診が終わったら帰っていいって。検査入院したほうがいいんだろうけど、まあ受肉のほうが大切だからね」

肩をすくめて興味なさそうに舞が答えた。手はビニール袋に伸び、モモの缶詰を取り出す。

ベッドにテーブルを立てて缶を載せて、それがプルタブ付のタイプだと気づくと笑ってベリベリと蓋を開けた。

「それで、所長はなんて？」

「ああ、連盟に報告もし終わって、今は葬儀屋の手配をしてるってよ」

中野はビニール袋に手を突っ込み、小袋に詰められたフォークを探り当てて舞に手渡す。

舞は礼を言っ受取り、モモを立てたフォークで潰すように切り分ける。

「そりゃ、受肉してるならそうなるよね。どれくらいぶりだった？」

「まあ”あの件”を除けば、何年か振りつつあったかな」

「六年ぶりね。六年前は、酷かったわ。とても」

米原が補足し、目を伏せる。六年前には葬儀屋と何の関わりもなかった二人は言葉に詰まる。

しかし米原はすぐに目を開けて二人を見据えた。

「でも、今回は六年前とも”あの件”とも違う点があるわ」

舞はモモをフォークで刺して、口に運ぶ。その動作と同時にうなずいた。

「受肉するのが早すぎる」

見舞い客用のイスを米原に譲った中野は手持ちの鞆を開き、紙束を取り出す。事務所のファイルに収められている今回の資料のコピーだ。

「今回の故人、佐藤美由紀はつい五日前に亡くなった。いくら葬儀屋で靈気が強いといっても、一週間も経たずに受肉するのは妙だ」
「受肉するには当人の血液型、誕生月齢、靈質の近い体がなければならぬ。靈気が強ければある程度無視して受肉することもあるけど……無差別に受肉できるほどの靈気なら今頃街一つ壊滅してるわね」

米原は顎に手を当てて前提から辿り、片目を閉じて笑った。

強すぎる靈気は触れるだけで生物に影響を与える。しかし舞がじかに見てきた靈気は、確かに強いものではあったが、そんな異常な強さのものではなかった。

中野はめくっていた資料の束をばさりとまとめて米原の横顔を見る。

「つまり、今回の受肉には……」

「黒幕がいる。ま、そういうことですよ」

舞が言葉をさらって、フォークに刺したモモを食べた。

その後、舞の見た女の特徴を書き留めたり情報を整理したりしている、扉がノックされた。

「失礼します。武藤さん、検診の時間です」

中性的な声が響き、ゆつくりと扉を開けて入ってきた。その人物を見て、中野と米原は思わず声を上げる。

入ってきたのは依頼に来た院長に引っ付いてきていた部下だった。部下であり医者だった彼は二人を見て会釈をした。

扉を閉めてゆつくりと舞の隣に立つと、見舞いに来た二人に一言断りを入れて検診を始める。

検診といっても外傷も少ない舞は問診を軽く行うくらいだ。たいした事をするわけでもなく、病室のまま行い、医者の荷物もほとんどない。

「先生、医者でしかも舞ちゃんの担当だったんですね」

米原が検診を進める医者の手之余裕があることを確認して話しかける。

彼は問診を書きとめながら押しの弱そうな苦笑を浮かべた。

「ええ、まあ」

「先生は葬儀屋の”こちらの仕事”にもお詳しいんですか？」

「ええ、まあ」

曖昧な返事にも米原は愛想のいい笑いを浮かべて手を合わせる。

「やっぱり。だから舞ちゃんの担当になったんですね。」

「ええ、まあ」

「……えあゝ……」

米原の笑顔が引きつって固まった。話が途切れた。

世間話をなんとか続けようと努力する女性の姿はさておいて、中野が途中で話を引き継ぐ。

「先生は佐藤美由紀さんとは知り合いでしたか？」

手が止まった。

中野の目が曖昧な笑みを浮かべる医者横顔を射止める。

「……ええ、まあ」

彼はすぐに手を動かしてボールペンで書き込み続けた。

中野は見つけた傷にさらに手を入れる。

「親しかったんですか？」

「ええ。……一応、交際していましたよ」

米原と目を合わせた。

声は平常を保って言葉を続ける。

「なるほど。それはご愁傷様です」

「いえ」

検診する音が空々しく病室に消える。今は、なんだろう、脈拍を確認しているのだろうか。

「中野は少し言葉を迷った後に、口を開いた。

「仮に、彼女が取り戻せるとしたらどうしますか？」

「なんでそんなことを聞くんですか？」

医者は中野の言葉尻に重なるようにして問い返した。下手に声を荒げるよりもよほど烈しい怒りが見て取れる。

米原は身も蓋もない中野の言葉とそれに対する医者への反応に慌てふためき、中野の腕を何度も叩いて促す。

中野は多少驚いてはいたが、落ち着いたまま頭を下げた。

「……失礼」

「ごめんなさい」

米原も中野に続いて頭を下げる。

しばらくはボールペンの走る音だけが聞こえた。さすがの舞も雰囲気が悪いことを感じ取ってむすりと唇を引き結んで黙り込む。

ボールペンの音が消えて、ぱちり、とペンをノックしてヘッドを収納する音が聞こえる。

医者は静かに口を開いた。

「受肉のことなら、彼女から聞いています。安定して受肉させることができれば、記憶も取り戻して生前と全く同じように生活できるんですよ」

「……そうですね。ですがそれは」

「それは霊気のとて強い場合に限られる。……葬儀屋といっても、その状態になれるほどの強さの霊気を持つ人はいないそうですね。もちろん、美由紀はそれほど強くない」

中野の補足も必要がないと言うように言葉を重ねる。医者はゆっ

くりと振り返って中野を正面から見た。
曖昧な力のない笑みを浮かべる。

「霊気のない者が受肉すると、正気を失ってしまうというではありませんか。未練や衝動から、どんな行動を起こすのか分かったものではありません。受肉すると霊気の影響で身体能力が単純にとても強くなる。誰かを傷つけてしまうことも多いでしょう。無差別に誰かを傷つけるような、そんな美由紀は見たくありませんよ」

肩をすくめて立ち上がり、舞に一声掛けて病室をゆっくりとした足取りで後にした。

扉が閉まり、足音が離れていく。
唐突に米原が中野の頭にチョップを叩き込んだ。

「いてえ」

「いてえ、じゃないでしょう。あんなに不躰に質問して、失礼でしょう!？」

「それは思っただんですが、ほかに聞きかたが思いつかなかったんですよ」

眉を逆立てて言い募る米原に、ひらひらと手を振って弁解する。
無頓着な中野を見て怒りの削がれた米原はため息をついた。
代わりに困り顔で思案げにうつむく。

「まったく。美由紀さんとは結婚も近かったって話なんだから、さぞ傷心でしょうに。あまり気にしてないといいのだけど」
「え、そうだったんですか」

知らなかったな、と中野は頭をかく。
舞がにやにやと揶揄するような笑いを浮かべながら言った。

「中野は空気読めないからね」
「コイキングマイウェイ自己中のお前にだけは言われたくねえ！」

舞がモモを頬張るのを指差して中野は叫ぶ。再び米原にとつかれて病院で騒ぐなと注意された。

モモを嚙下えんかして、フォークについた果汁を舐めながら舞は目を細める。

「ま、どちらにしろ、あの先生に受肉させる動機はないって事だね」
「そうね。あれだけ知っていれば、やるメリットはないでしょう」

受肉というのはその性質上、個人情報詳しく知っていなければ出来ない。その意味で婚約者だったというあの医者は第一級の容疑者だが、受肉について知っている以上、それを避けるだけの理由がある。

受肉というのは、死者の顔に泥を塗るような行為だからだ。
んっ、と声を上げて舞はフォークを口から離す。

「そーいえば、そもそもさ、なんで美由紀さんは死んだの？」

「さあな、そこは警察が頑張ってるんじゃないのか？」

「今はまだ原因不明の変死这件事情までしか分かってないわね。状況的には毒死の線が強そうだけど、毒は検出されなかったそうよ」

米原がまた補足した。ふんふん、と缶の底に残っていたモモの欠片を口に放りこみながら舞は頷く。

び、とフォークを立てて声を低めて言った。

「殺した犯人がそのまま操ってる！ とか」

「あるかもしれないけど、私たちにできることなんてなくなっちゃ

「うわよ」

米原が苦笑して答えた。

葬儀屋は言葉通り死者を弔い送ることが仕事であり、真相解明などお門違いもいいところだ。

「霊媒は証拠にならないって公的に決まってるんだから」

「まーそうなんですけどねえ。私たちは死霊を祓うことだけが仕事だしね」

舞は空になった缶にフォークを立てかけて頭の後ろで腕を組む。

明らかにつまらなそうな態度の舞に中野は苦笑して、荷物をまとめた。

「とりあえず、今は受肉に使われた死体の身元と出所を調べる必要がありそうだな」

「イマドキ、死体泥棒なんてやったらあつという間に割れそうだけどね」

笑って、舞は足を滑らせて横座りになってから立ち上がる。その動作と同時に残りの缶詰の入ったビニール袋を取り、空になったモノ缶詰とフォークを少し迷った後にビニール袋に放り込んだ。

中野は少し眉を寄せて舞の手元を見た。

「べとべとになるぞ」

「しょうがないじゃん、ほかに入れ物がないんだから」

くちびるを尖らせる舞はさほど気にしたようすもなく袋を提げて先頭に立って廊下に出る。振り返って中野と米原を見た。

「じゃあほら、さつさと帰ろう」

中野と米原は顔を見合わせてお互いに苦笑を見せ合ったあと、歩き出す。

肩で鞆を引つ掛けて背負うように持ちながら、舞の隣に並んだ中野が笑う。

「お気楽だな」

「そりゃね。真相なんて分からなくても、要は被えばそれでいいんだから」

「そうね。黒幕が分かっても、受肉しちゃったのがどうにかなるわけでもないしね」

同じく舞の隣に並んだ米原が笑いながら言った。

エレベータを使つて一階まで下りる。ボタンを押して扉が閉まり、動き始める独特の浮遊感が過つた後、階数表記が点滅して下がって行く。

ふと、米原が中野に尋ねた。

「そついえば中野くん、なにで病院まで来たの？」

「なにつて、車つすよ」

「そうじゃなくて、いややっぱりそうだと思ってたけど、えっと…
…もしかして、ウチの車で来てる？」

米原が微妙に切羽詰った表情になりながら中野の顔を見上げる。

中野は米原の表情の意味に微塵も気づかずに、軽く答えた。

「ええ、そうですけど」

キンコン、という音がして一階についた。

同時に中野の額にチヨップが炸裂した。

「ぐあぁっ」

「舞ちゃん、急ぐわよ!」

「え? ああ、はい」

エレベータを待っていた看護婦が驚いている脇をすり抜けて、米原が中野を引っ張って早足で行く。
その後を追いながら舞が尋ねた。

「どうしたんですか?」

「一般の来院者用駐車場に霊柩車が止まってるなんて信用問題ですよっ?」

舞の先を歩く米原が早口に答える。中野はわけが分からないといった顔でされるがままになっている。
その二人を眺めるでもなく眺めて、舞はなにか悟りきったような平坦な表情を浮かべてつぶやいた。

「ああ。中野が空気読めないから」

「一般常識です!」

ピシヤリと言い返された。

5th program イヤシイヤス(後書き)

私の回りは健勝な場合が多く、入院やお見舞いの経験がありません。色々適当です。

モモ缶つめえ。

6st / program サグリサグル

制服姿にツインテールの、完全に普段通りの装いをした舞がアスファルトの上に屈み込み、地面に手を出して目を伏せる。

その後ろに立って中野は周囲をうかがう。最近は路上駐車を取り締まりも厳しいのだ。

舞はしばらく目を伏せていたが、やがて立ち上がった。手を払いながら中野を振り返り、首を振る。

「やっぱり、欠片も感じない」

「そうか。米原さんでないと分からないかね」

「そーね、いちから探り直さないと分からないわ」

舞は肩をすくめ、足元を見下ろす。

日に焼けたアスファルトに、昼前の高い日に照らされて舞の影が落ちている。

「強い霊気だったから多少なりと辿れるかと思ったんだけど」

「ま、黒幕つきの受肉霊がそう簡単に足跡を辿らせてくれるとも思えないしな」

灰色のスーツを着崩した中野があまり関心なさそうに言う。靈感のない彼にはどうせ分かりっこないのだから他人事だ。

舞は気に入らないというふうに鼻にしわを寄せて腕を組む。

「正気のない受肉霊に、証拠を残さないように気を使わせるなんてできないでしょ。霊気を抜うにしても、ここは関係ない霊気が残ってるからそれはないし。なんか全く知らないトリックでも絡んでるのかしら」

一寸の虫にも五分の魂、という慣用句は「小さな者でも相応の意地があるから侮れない」というような意味だが、字義通りの意味もある。

殺生の全く起きない場所というところはなく、空気中の塵埃程度の量ながら霊気は必ず混じっている。

被ってしまったえばその区域は霊気がごっそりなくなるため、逆に分かるのだ。

「全く知らないトリックって、どんな？」

尋ねながら、中野は胸ポケットから煙草の箱を取り出した。吸うかどうか迷っているかのように見つめながら手の中で持て遊ぶ。

んー、と舞はうなりながら腰と顎にそれぞれ手を当てて考える。

しばらくうなると、ぴっと人差し指を立てて笑う。

「受肉霊を操る術とか？ キョンシーとかとはまた違ったやつ」

「んな都合よくいくかね。だいたいキョンシーは受肉霊とは違う」

「そんなの分かってるわよ」

唇を尖らせて舞が中野を見ていると、不意に着信音が鳴り響いた。中野のスーツからだ。

中野はポケットから携帯電話を取り出してすぐに電話に出る。

それが会社用の携帯だと分かると舞も盗み聞きせんと顔を寄せてきたため、すぐにスピーカーモードに切り替えた。

「もしもし」

「ああ、中野くん？」

「所長。どうかしましたか？」

「まだ確定じゃないんだけど、進展状況を伝えようと思ってね。受

肉に使われた死体の件』

中野と舞は目を合わせる。通話時間を表示している無機質な携帯の画面に目を落として中野は先を促した。

電話の向こうでも調べ続けているのか、キーボードを叩く音や資料をめくる音が混じりつつ、所長は言う。

『それがどうも、死体泥棒のようすがないんだよね。まあ、行方不明になったまま見つからない人は毎年千人くらいはいるから、その線なのかもしれないけど。今そつちを洗ってる』

「とりあえず、まっとうな死体じゃないんすね」

『ま、そりゃあ、ね。とりあえず、死体はくすねたものじゃないから、もつとややこしいことになるかもってことだけ覚えといて。じや、なにか分かったら追って連絡する……あ、待って、米原さんが』
『ら』

ピリリ、という音がして舞の携帯が鳴った。

一度舞と中野で顔を見合わせて、携帯を取り出して開く。写真添付のメールだ。

『もしもし、中野くん？ 電話変わって、米原です』

「米原さん。これは……地図ですか？」

舞は開いた写真データを中野に見せており、それを見ながら電話口に言う。

米原は電話の向こうで肯定の返事をして、補足した。

『受肉霊の出現地点よ。おかしな話なんだけど。さっきまでは全く感じなかったのに、今になって急に彼女の霊気が現れたの。でも、たぶん本体じゃないわ。強さが全然違う』

「どつちにしろ、ろくなもんじゃありませんね。分かりました、急行します」

中野はそうつぶやいて手に持ったままだった煙草を胸ポケットに押し込み、きびすを返して霊柩車に駆け寄る。舞もそれに続いた。電話口で米原がそつと言つ。

『気をつけてね』

「ありがとうございます」

中野は笑つて、電話を切つた。

舞は昨日使つた地図を開き、写真で示されてる場所と照合しようとしている。しかし中野はそれを待ちもせず、車を発進させた。それを感じて、カーブで揺らめきつつ舞は中野の横顔を見る。

「ちょ、ちょっと。場所、分かつてんの？」

「ああ。地元なら、覚えるためにかなり走りこんだからな」

即答して、強く笑つた。

中野はハンドルを片手で支持しつつ、地図を適当に指し示す。

「その写真に、大学病院が写ってるだろ。場所はそれで十分に分かる」

「ええ？ ああ、まあ。そっか」

ナビするだけ無駄な中野にため息をついて、舞は座席に深く座つた。

ふたたび細い路地を曲がる。その拍子に揺れるルームミラーに下がった交通安全のお守りを眺めた。

舞は口の端にかすかに笑みを載せる。

「ま、楽でいいけどね」

ややもすれば、遠めにその大病院が見えてきた。

同時に靈気もかすかに感じ取れる。

舞は少し身を乗り出しながら目を細めた。

「この感じは……なんだろう、分身？」

「分身だあ？」

舞のつぶやきに思いつき怪訝に眉をひそめて中野が聞き返した。

胡乱げなその声に舞はあまり構うことなく、集中して靈気の間をたどっていく。

「うーん、なんていうのかな。ウザい感じ」

なんとも身も蓋もない感想が飛び出した。

中野は気が抜けたような顔をする。

「なんだそりゃ」

「粘着質でイラっと来る。あんまい感じはしないなあ……近くなってきた」

中野の気合のない返事に突っ込むこともなく、舞は目を伏せたまま素直に答え、にわかに集中を高める。

つられて中野も注意力を増して、車通りの全くない交差点の信号を確認し、進もうとアクセルを踏みなおした。

そのとき。

右から猛スピードで車が飛び出した。

「うおお!?!」
「わあっ!?!」

驚いて急ブレーキを掛けつつハンドルを切ってドリフトするように反対車線に乗り出しつつ車を避ける。急な動きに振り回されて舞は悲鳴を上げた。

舞は中野に文句をつけようと口を開いたが、そのまま閉じることが出来なくなった。

走り去った車を追って、白いもやの塊のような不気味な人影がクレイアニメーションのように生き生きときこちなく動いて駆け抜けていく。

舞と中野は呆けてそれを見ていた。
いち早く我に帰ったのは舞だった。

「って、あれが靈気の正体じゃん! 中野! あ! いやちょっと待って!」

動揺しているようにわめいたあと助手席から飛び出して後部に消える。

やがて後ろからくぐもった舞の音が聞こえてきた。

「先回りして! この”靈枢車”の本領を發揮しよう!」
「え? ……ああ。分かった。気をつけてな」
「そっちこそね!」

舞の声を受けて、中野はハンドルを切って車を走り出させる。交通安全のお守りが揺れる。

道を選んで走りつつ、中野は声を張り上げた。

「靈気はどっちでどれくらいの距離だ!?!」

わずかな間を置いて、少し追い詰められているような感じの上ずった声で返事が返る。

「えっと、左前のほうで、ちょっと遠い？ 斜めに走ってるっぽい！」

「くそ、分かりづれえ」

小さな声でボソリと悪態をつきながらも、経験と勘で距離を割り出し、頭の中の地図と照らし合わせて最適なポイントを適宜考える。騒ぎはそれほど起こっていないから、人通りの少ないところか、あるいは靈氣の影響が出ているというところだろう。そんなことを考えながらハンドルを切っていく。

「近付いてるよ！」

舞が声を張り上げる。

かすかに笑みを浮かべながら、中野は小さな声でつぶやいた。

「分かってるさ、近付いてるんだからな」

ハンドルを切り、交差点を曲がった。

二人は奇しくも同時に同じ言葉をつむぐ。

「来た……」

霊柩車の右後方を走る車の運転手が顔を引きつらせたのを見て、舞は思わず笑みを浮かべた。

それは驚くだろう。

霊柩車が後部を全開にして、かつそのなかに制服姿の女の子がし

やがみ込んでいるのだ。

そしてその左右には、もっと驚くものが並んでいる。

足元に札を剥がした槍を転がし、暴れないように膝で抑えた。次いで舞はためらわずにその左右に並んでいるものを両手でそれぞれ取る。

「その車！ 気をつけてね」

ウイंकをしてみせて、グリップを握り、マシンガンを構えた。

引き金を引く。マズルフラッシュが連続で瞬き、銃声が続けざまに鳴り響く。

無理に片手持ちしている手首にかなりの圧力が掛かり、空薬きょうがバラバラと排出されて転がる。

ばら撒かれる弾丸は、車を追って走る大量の人型を撃ち抜き削つていく。

「気が狂ってるわね、こんな装備を揃えるなんて」

銃を収納していたラックに取り付けられている弾倉を取り、弾切れになった弾倉を交換する。

暴風雨のように惜しげもなく降り注ぐ暴虐の嵐が止んで勢いを増したもやを狙い、再びマシンガンが火を噴いた。

霊柩車には棺を安定して入れるためのレーンや固定するための口ツクがついている。中野はそれを利用して銃を収納する特製ラックを作り、ズラリと見本市を思わせるほど銃を並べて見せたのだ。もちろん取り外し可能で通常営業に支障はない。

こんなものは真つ当な手段で揃えられるはずもなく、また装備できるわけもない。

これらはいくまで靈的な適正を持たない中野のような葬儀屋が応戦するための”自衛のための武力”という名目になっている。

事実、弾倉や銃身には朱墨で書き込まれていたり紙垂しでが吊り下げられていたりしていた。

こういったポーズを取ることで認可をもぎ取ってはいるものの、当然ながらグレイゾーンの下端を攻めている。

そんな色々とバチが当たりそうな銃器で弾をばら撒いていると、もやが狙いを変えて霊枢車を狙うようになってきた。

「いい子ね……そうよ、こっちにいらっしやい」

舞は笑みを浮かべながら銃を撃ち続ける。

弾が切れ、焼け付いたように白煙を昇らせる銃身を振って冷まそうとしながら次の弾倉を取る。

入れ替えながら、さきほどから全く減った様子がないもやの塊を見る。

「なんかキリがないわね。おかしいな、ちゃんと被ってるはずなんだけど」

霊気の総量がさほど変化していないのを見て、首をかしげながら再び撃とうと構える。

しかし少し迷った後、片手を下ろして片方だけでフルオートの引き金を引く。

マズルフラッシュが連続し、断続的な銃声が響き、もはや霊枢車をこぞって襲うもやの群れを弾丸が食い破っていく。

しかし。

舞は剣呑に目を細めた。

「どうも気持ちが悪いわね。霊気も込めてるのに被えないなんて」

撃つのを止めた銃を持ち上げて、つぶやく。

貫かれて吹き散らされた霊気が集まってきたのを見て、眉を寄せて、再び銃を構えた。今度は片目を閉じて照準をつける。

精密に狙いをつけられないのを承知で、マシンガンで連射する。着弾して吹き散らされるもやを見て狙いを微調整する。

パキンツ、という霊気の音が聞こえた気がした。

正確には、霊気の核が奏でる、音とは微かに違った感覚の共振が。

「やっぱり、憑依する核があるのね」

砂細工が風に崩れるように、霊気の核を射抜かれたもやの塊は空中に溶けて消えていく。

目を細めてそれを見送った舞は、少し目を伏せた。開く。

もやの群れを見据えて、両手に銃を構えた。

両手からマズルフラッシュが溢れる。弾幕がなくなってかなり近くまで迫っていたもやの塊を次々と砕いていく。個体によって違う核の位置を見極め聞き分け、容赦なく撃ち抜く。

次々ともやが崩れていき、ややもするとその影はなくなった。

「よし」

片手を伸ばして、着弾する場所を見ながら核へ向けて場所を調整する。左胸。ぱすつ、と弾が射抜いてもやが飛び散った。

崩れて解けて消えていく。

「これで終わりね」

ツインテールを風に遊ばせながら、白煙をたなびかせる銃口をあげた。

もやを壊滅させたことを確認したのか、霊枢車がゆっくりと減速

していく。

舞は銃をラックに戻して、放り捨てた弾倉や空薬きょうを掻き分けて槍を取り、しっかりと布で巻いた。元通り置いて固定する。

その頃には、霊柩車は停車していた。

「また盛大に撃ちやがって」

後部から下りて扉を閉める舞に、窓から身を乗り出して振り返った中野が声をかけた。

顔をしかめている中野に笑みをを見せて、舞は風に乱れたツインテールの毛先をなでつける。

「本望でしょ？」

「バカガキが」

中野が窓の中に引っ込んだ。

笑みを深めて、舞は小走りで助手席まで回り込み、乗り込む。中野はそれを見もせずギアをバックに入れて霊柩車をUターンさせた。

「さっきの車を見に行く」

「ま、妥当だね。あの受肉霊となんか関係があるのは間違いないし」

車道に戻っていくと、ほどなく、さきほどの車を見つけることが出来た。狙いが霊柩車に逸れてから、そのまま場所を動いてないのだろう。

中野はその車の前につけて、二人とも霊柩車を降りた。

ナンバーを確認し、運転席を見る。運転手らしい男は青い顔で失神していた。

中野と舞は顔を見合わせて苦笑する。

「すみません」

窓をノックする。なかなか起きないので何度もノックしていると、運転手はピクリとも動かないまま「なんですか……」と寝ぼけたような声が聞こえた。また二人は顔を合わせる。

後部の窓が開いた。

「あれっ？」

「あなたは……」

舞と中野は思わずめいめい驚いた声を上げてその顔を見る。

「な、なんです？ あなたたちは」

ふたりの反応にたじろぐその男は、事務所に依頼しに来た院長だった。

風が吹き、停車するふたりの背後を車が駆け抜ける。人通りが戻ってきていた。

6st / program サグリサグル（後書き）

マシンガン両手持ちこそ正しくロマン。

この話、ぶっちゃけツインテ少女に銃持たせたかっただけです。アングラな仕事であってもアウトサイダーではないって、超便利ですね。

本当はこの話。

霊枢車の側面がパカリと開いてミサイルを雨アラレとばら撒いたり、機関銃が飛び出して轟音を上げて火を吹いたり、というのが初期案でした。

昔のスーパー戦隊シリーズみたいでカッコイイね！

……まーさすがにそこまでやっちゃうと、霊枢車じゃなくて、霊枢車の形をしたナニモノかになってしまうので自重しましたけども。資金的にも無理ですし。

残念。

「あーもうわけ分かんないし疲れた!」

事務所のドアを開けて舞が入ってくるなり両腕を振り上げてわめいた。

どっかりとソファに身を投げ出して転がる。

その後が続いて中野が入ってきて、デスクから顔を上げた所長が口を開いた。

「なにかあったの?」

中野はジャケットを脱いで肩をほぐすように首を回し、苦笑を浮かべる。

「まあ、かなりのことが」

舞の声を聞きつけたのか、米原が給湯室からコーヒーマシンを二つ持って戻ってきた。

中野と舞にそれぞれ手渡しして、首をかしげる。

「なにがあったの?」

「そうですね。最初から順に話します」

中野はコーヒーマシンで口を湿らせて、米原に連絡を受けた後のことを洗いざらい喋った。

霊気を憑依させた分体が実体を持って暴れていたこと、それは依頼人である院長を狙ったものであること、話を聞くと院長は狙われる覚えはないと言っていることなどだ。

話を聞き終えて所長は顎に手を当てながらつぶやく。

「あのひとはたしか、新薬を研究してるんだっけ。副作用の少ない薬を作るための研究だったかな」

「へえ。院長なのに医者じゃないんだ」

頭の後ろで腕を組みながら舞は意外そうに言う。

所長は手を下ろし、微笑を浮かべて答えた。

「院長になって安定するに連れて医者から研究者に変わっていったみたいだね」

「それより、そんな人がなんで狙われてたのかしら」

米原が沈思するようにつつむきながらつぶやく。

ひと仕事終えたばかりで頭が回らないのか、中野がコーヒーをすすりながら深く考えずに返した。

「やっぱり後ろ暗いところがあるんじゃないですか？」

「ま、単純に考えればそうだよ。腹に一物抱えてる人間が正直に言うわけないし」

舞は簡単に尻馬に乗る。そんなふたりの様子に米原は苦笑した。

しかし、所長は難しい顔をして黙り込む。

にわかにはパソコンに向かって何か操作を始めた。

「……まだ判断は難しいんだけど、ちょっと気になることがあってね」

言って、パソコンの画面をみんなに見えるように回した。

早くも積み重なり始めた紙束が下のほうを隠していることに気づ

いてどかす。

改めて集まってきた三人に示した。

「これは、名簿ですか？」

「そう。最近彼の病院で亡くなった人のデータだ」

言われて、三人は表になっている文字の羅列に目を通す。

特別個人情報として重要な情報は削られており、カタカナの氏名と職業、病名、市までの住所や簡易な経過や状態と死亡日時が記されている。

しばらくして舞が怪訝な顔で所長を見た。

「……特に不自然な点はないんじゃない？」

「よく見て。中期の入院患者ばかりだ。あんな大きい病院なのに延命処置をしている患者が少ない」

ほかの病院より病室の回転率がほんの少しいい。

そういうことを言われるとほのかに作為臭く感じ取れてしまう。

舞は眉を寄せて口をへの字にゆがめた。

しかし米原さんは冷静に表を見直して所長に言う。

「偶然では？」

「これまでの経営の総合データになるけど、見てごらん。入院費を支払うのが難しいと思うような患者は入院期間が極端に短い」

その話を聞いてかすかに沈黙が下りる。

いまひとつ理解が及んでなさそうな中野と舞とは違い、米原は少し考え込んでいた。

入院費を払えない患者をいつまでも置いておく病院はないし、その辺りの助成金が受けられる環境なら置いてある。正直、どこの病

院もそうだろう。

しかし、その数字にそこはかたない違和感を覚えるのも確かだった。叩けば簡単にホコリが出そうな雰囲気を出している。

やがてゆっくりと口を開く。

「本当かどうかは分かりませんが……つまり、黒い手段を使って患者の数を調整してる、と？」

「まあ、ね……目立たない程度だけど。長期的に見ると、そんな気がしてね」

急にあまり自信のないような声になって所長は肩をすくめた。ディスプレイの向きを戻す。

深く考えていない舞は一步下がって腕を組んだ。

「それが本当なら、えげつないことしてるね。アレじゃない？ 新薬とやらで証拠も残さずサクッと」

「さあね……検死では毒は見つからなかったそうだから分からないね。まあ、毒のなかには死後に滞留するうちに分解されて無害な成分になる、というものもあるにはあるけど」

当然禁薬だし、普通に見られるものじゃないね、などと言って首を振る。

中野が飲み終えたマグカップの中身を見て肩をすくめた。

「原因不明の変死なんだし、実はそんな毒なのかもしれないよ。殺されたのなら受肉霊に狙われるのも分かります」

「ここら。そんなふざけないの。そんな安い刑事小説でも使わないうような展開じゃなくて、もっと普通に、なにかその院長さんを苦にして死ぬような原因があったのかもしれないでしょう？」

米原はあまりにお気楽に物騒な推理を展開する舞と中野に思わず小さく吹き出して、変な推理を広げる二人をたしなめた。

しかし、ソファの背もたれに腰を乗せた舞が少し真面目な声で米原に答える。

「でも、自殺なら死因も分からないっていうのはおかしくないですか？」

「ええ？ ああ、まあ、そうねえ。確かに」

頬に手を当てて困ったように眉を下げた。

そういえば今回の被害者は死後三十時間近く経ってから発見されたという。

事務所内に微妙な空気が流れ始めて、所長は慌てたようにまくしたてた。

「ちょ、ちょっとちょっと。米原さんまで影響受けないでよ。それじゃあ受肉のほうはなんて説明をつけるのさ。偶然で済ませる気？」

今回は亡くなっただけでなく、その霊が受肉しているのだ。ただ恨みがあってこの世に残っただけで受肉できるほど簡単に出来ていたら、世の中は祟りで溢れている。

舞は少し考えた後に人差し指を立てる。

「院長の悪事を知って、義勇に目覚めた人とか」

「わざわざ受肉できる死体を用意して？ そんなことせずに告発すればよかったじゃないか」

所長が即座に反論して、舞は口を閉じた。
わずかな間の後、中野が敵かに口を開く。

「佐藤美由紀さんと婚約していた医者が、それを知って復讐するた
め」

推理というより当てずっぽうや思いつきに近い発言を受けて所長
は少し笑った。仰け反って背もたれに体を預ける。

「復讐って、そんな馬鹿な。だいたい彼は受肉について知って……
あ」

所長の動きが停止した。

中野たちの注視を受けて、所長は困ったような笑いを口の端に浮
かべる。

「ひよっとしたら、知ってるから、かも……？」

「どういう意味？」

「死霊、とくに殺された霊は霊気が強ければ復讐を未練とすること
が多い。そこに受肉させてしまえば、それは確実に院長を殺してく
れるんじゃない？」

事務所に沈黙が下りた。

米原さんが固い声で中野に尋ねる。

「院長さん、あのあとどうしたの？」

「えっと、話を聞いた後、狙われてるかもしれないから念のため事
務所まで護符を取りに来てくれ、と言っております」

「つまりここに来る？」

舞が確認するように聞く。

中野がそれにならずくより速く、所長が問いを重ねた。

「いや、それよりも、また開けっ広げで移動してる？」

事務所に沈黙が下りる。

混乱の極地に一瞬にして陥った。

「わ、私、御札を用意するわ！」

「いや、あの医者に電話してみるよ！」

「あ、私も着替えてくる！」

「俺も銃器を整備しないと！」

「後になさい！今は着替えて！」

わあわあと騒ぎ、所長が電話をかけ、女性二人が事務所から出て中野は喪服を引っ張り出してスーツから着替え始める。

中野が男性らしい早着替えを済ませた頃に所長の電話が繋がった。

勢い込んで声を入れた所長だが、直後に一挙に沈静化する。

「え？……はい、はい。……そうなんですか。ええ、分かりました。はい。え、では、はい。ありがとうございます、失礼します」

所長は口を閉ざして受話器を置いた。

ジャケットのしわを伸ばしながら中野が恐る恐る尋ねる。

「電話では、なんて？」

「あの医者さんはいないってさ。数時間くらい前から姿が見えないらしい。これはいいよ、三文芝居みたいになってきたかもしれない……」

頭を抱えてうめく。

やがて気を取り直して、立ち上がった。

「こうなったらしょうがない。僕たちで直接あの依頼主のところに出向いて受肉霊が来たところを迎撃しよう」

中野は少しためらって口を開く。

「……でも、この展開が本当なら依頼主さんは、殺人犯すよ？」

「そんなこと、知らないね」

所長は即答した。

彼自身喪服の黒いジャケットを羽織り、あっけに取られている中野を振り返って笑う。

「葬儀屋は”死霊による被害”を起こさないために”死霊を祓うこと”が仕事だ。守る相手が誰であろうとどうでもいいよ」

支度を終えた米原と舞が事務所に入ってきた。巫女姿と喪服だ。そのふたりを見て、所長はうなずく。

中野もその様子を見て苦笑し、霊柩車のキーを確かめた。そのとき。

プルルル、と。

電話が鳴り始めた。所長がすぐに受話器を取って耳に当て、スピーカーに切り替える。

『　　、　　』

声が遠かった。

何を言っているのか聞き取れない。

所長が怪訝に顔をしかめて声を上げる。

「もしもし？」

『、っ！』

「もしもし？ どなたですか？ もしもーし！？」

『ブツッ』

回線が切れた。

全員で顔を見合わせる。

誰もが一樣に険しい顔をしていた。事ここに至って、誰もが状況を認識せざるを得なくなった。

「いよいよ、余裕がなくなってきたのかもしれない……」

所長がつぶやく。

普段は温厚な米原が厳しい表情で声を張り上げた。

「私は場所を見つけ出す。みんなはいつでも出られるようにしておいてー。」

返事は異口同音に。

「はい！」

事務所を飛び出す。米原は神域に駆け込み、ほかの三人は地下の駐車場まで駆け下りる。

舞と中野で霊柩車に搭載してある弾倉や銃を整理し、戦闘体勢を整えられるようにする。

所長はその場に打ち水をして舞の槍を広げた。濡れた地面の上に寝かせた布が湿る。

「おいで、舞ちゃん」

「はい」

呼ばれ、舞はしゃがみ込む彼の向かいに立つ。

所長は目を伏せて手で印を組み、貼り付けてある札を撫でた。

舞は剥がすように取り外した札が、自然にハラリと外れる。

槍を持ち、右、左、中央と柄を三回叩いた。

「どうぞ」

所長は微笑み、舞に槍を差し出す。

「ありがとうございます」

舞は嬉しそうに笑って受け取り、愛おしそうに、槍に上気した頬を寄せた。目を伏せる。

所長は中野に顔を向けたが、中野は親指を立てて返した。苦笑で迎える。

「さて、それじゃあ行こうか、舞ちゃん」

駐車場を歩きながら所長は声をかけた。

槍を抱える舞は不思議そうに首をかしげる。

「米原さん、まだ見つけてないんじゃないですか？」

「見つけてから出たんじゃ遅いかもしれないでしょ？ 幸い二組に分かれる。片方が適当に出て行っても、片方がしっかりすれば問題ない」

「問題大有りだと思います……」

舞の簡潔な一言に笑いながら、駐輪されている大型二輪に歩み寄

る。

フルフェイス型のヘルメットを取って舞に投げ渡した。

「ちょっと大きいから、ちょうどいいと思うよ」

舞は何のことかと所長を見る。

所長はシールドに色が入ったフルフェイスのヘルメットを被り、頭の横で人差し指をくるくると回した。

ツインテールのことだ。

少しむっとした舞は唇を尖らせながらヘルメットを被った。

本当にびったりだった。

「それじゃあ、米原さんが来たらよろしく」

二人乗りでまたがり、ヘルメット越しのくぐもった声で所長が中野に声をかけた。

中野は了解を言う代わりに手をひらひらと振って、別の言葉を送る。

「事故らないでくださいね、気をつけて」

「ははっ。分かってる、ありがとう」

バイクのエンジンを始動させる。一度大きく震え、すぐにアイドリングを始めた。

所長はバイクの様子を確認し、半分振り返って声を上げる。

「舞ちゃん、行くよ？」

「は、はい！」

舞が上ずった声で答えた。

槍を横抱きにして、決して落とさないように慎重に握りながら所長につかまっている。

所長は返事を確認すると前を向いた。

アクセルを開けて、発車する。

坂になっている出口を登って、地上に駆けて行った。

「おーおー、張り切ってるねえ所長」

残された中野はエンジンの響きに満足げに笑みを浮かべる。その笑みのまま残りの作業と最終確認を行った。

すべての準備を終えて手持ち無沙汰になった中野は、米原さんの様子を見てみようと駐車場から階段を上がる。

と、下りてきた米原と行き会った。

「あれ、中野くん。どうしたの？」

「米原さんの様子を見ようと。所長たち出ちゃいましたよ」

「ええっ？ もう、少しくらい待っててくれてもいいのに。私たちも急ぎましょう」

「はい」

急いで階段を駆け下りる巫女服姿の米原を追いかけながら、中野はかすかに微笑んだ。

駐車場まで降りると走って霊枢車に乗り込み、米原に急かされる中でエンジンを掛ける。その作業をしながら米原は携帯で所長、正確には運転していない舞に連絡を入れる。

明らかに向こうばかりを戦力と見て頼ってる行動だ。

車を発進させながら、中野が米原に言う。

「さきに俺に場所を教えてくださいよ」

「え？ あ、そうね。ごめんごめん、ちょっと焦っちゃってるわね」

ちろりと舌の先を見せて照れ、米原は地図を広げる。

「靈氣は商店街の東の通りを走ってたわ。また追われてるのかもしれないわね」

「またですか。院長も災難ですね」

中野は答えながらも頭の中に地図を広げながらハンドルを切る。米原は少しだけおかしそうに笑った。

「ふふ。まあ、怨まれることをしたのだから、当然の報いじゃないかしら。せいぜいおどかされるくらいはされてもいいと思うわ……あ、もしもし？」

電話がつながったようだ。

場所を手早く伝え、本体についての補足もする。

「たぶん、状況から考えて本体はどこか自分の靈氣を制御できる範囲に隠れてるわね。依頼主の安全を確保したら、舞ちゃんはすぐにそっちに向かつてくれないかしら」

言いながら、米原の瞳がいたずらっぽく光る。

「このまま受肉靈と決着をつけちゃいましょう」

電話が終わり、米原は携帯を閉じる。

ハンドルが切られ、車が曲がる。このまま行けば商店街のほうに向かうだろう。

中野は人影が急速に減ってきているのを確認して、傍らに声をかけた。

「着けられるんですか、決着。俺たちだけで」

「ふふ、大丈夫よ。それとも、中野くんは私が信じられない？」

「え、いえ。そんなことは」

「そう？ 信じてもらえて嬉しいわ」

米原は面白そうに笑い、窓から日の傾き始めた空を見上げる。

「……いい月ね」

まだ、日のある空は青い。

交通安全のお守りが揺れた。

7th program オモイオモウ（後書き）

わあ、素敵な真相ですね（笑）。

……プロットの途中で考えるのが面倒になったとか、そんなことは決してありませんよ？

とりあえず正義不在、依頼者悪徳、葬儀屋中立の構図になればな
んでもよかったです。ストーリーなんて飾りですもの。
だいたいそんな感じ。

8th program サイサイウ

中野は車を走らせる。

急ハンドルを切って車を曲げ、すぐに逆に切って慣性で傾いた車体を引き戻す。

出来ない人型の粘土細工のような白いもやをかわし、置き去りにして道路を駆ける。

「えい！」

助手席では窓から身を乗り出した米原が掛け声とともに札を向ける。当てたわけでもないものにもやは吹き散らされるが、すぐにまとまって動き出す。

米原は手を戻して口もとを隠し、笑う。

「やだ、えい、だって。お姉さん恥ずかしいわ」

「大丈夫です可愛いので早く靈気を何とかしてください！」

「ふふ、ありがと。分かってるわよ」

悲鳴のような中野の訴えに笑って答え、一握りの塩を撒いた。

それに触れたもやは抜われる。さらに核も含んでいたらしく、崩れて消えた。

「いっぱいいるわねえ」

米原は窓から体を座席に戻し、世間話をするような調子で笑いながら言った。

中央部に置いてある袋から塩と、被串はくしを手取る。

窓の外に身を乗り出して、被串を左右に振る。振るたびに靈気は

何かにぶつかつたように弾かれ、ぶつかり方によってはそのまま扱われる。最後に塩を撒いて、周囲に近付いていたもやの群れを押しやった。

それを確認して、中野は一息つく。

「さすがに、舞とは安定感が違いますね」

「ありがとう。でも、私は舞ちゃんみたいに問答無用で被うような力はないから、舞ちゃんみたいな活躍はできないわね」

米原が席に身を落ち着けて、微笑んだとき、バイクが目の前の力ドから飛び出してきてターンしながら止まった。そのターンに振り落とされたように後部に乗っている小柄な黒い人が転がり落ちる。

転がり落ちたように見えた喪服の少女はひらりと体勢を整えてしやがむように着地した。

槍を振りぬき、構える。

その横を霊柩車が駆け抜けた。

米原が振り返りながら弾んだ声を上げて手を合わせる。

「舞ちゃん」

舞は猛然と追いかけてきていたもやの群れに飛び込み、ぐるりと槍を大きく薙ぎ払った。

槍に触れたもやは片っ端から崩れて消えて、舞に襲い掛かった者は即座に振り返りにされて扱われる。

そして舞を無視して霊柩車を追ったもやも、後ろから追いかけた舞が背中から貫き、薙ぎ、切り捨てて扱った。

減速していた霊柩車に飛び乗り、ルーフから顔を出して中野に声をかける。

「院長は？」

「この先に行つてもらつて逃げてるはずだ。もやは分からない、大半は引き受けたはずだが」

「分かった」

舞はルーフから飛び降りてアスファルトを蹴り、傍らのコンビニの屋根を飛び越えて飛んでいった。カッソ、という音とともに脱ぎ捨てられたヘルメットがアスファルトを跳ねて転がり置き去りにされる。

あつという間に小さくなった舞を見送つて、中野はしみじみとつぶやいた。

「相変わらずとんでもない身体能力だな」

「あら、頼もしいじゃない」

「全くその通りで」

楽しそうな米原に苦笑して答える。

そんなふたりの乗る霊枢車に横付けしてバイクが並走した。

その乗り手に気づいた米原は笑い、髪を片手で押さえながら窓から身を乗り出す。

「では、所長。手はず通りをお願いしますね」

所長は頷き、片手を振つて”幸運を祈る”と合図をすると体を低くしてバイクのスピードを上げた。先の交差点を曲がっていくのを見送つて、米原は中野を振り返る。

「さて、それじゃあ。私たちも頑張りましょうか」

「そうですね。お願いしますよ米原さん。俺の命はあなたに掛かってるんですから」

「改めてそう言われると不安になってきたわ……」

頬に手を当てて首をかしげる米原が「もう少したくさんお札を作ってくればよかったかしら」などと言いながら手提げ袋を見下ろす。中野は沈黙したままハンドルを切った。

そのとき、ピリリリ、と米原の携帯が鳴る。米原はすぐに電話に出た。

「もしもし。舞ちゃん、どう、院長さんは無事？」

「はい。大丈夫です。持たされた護符も渡しました。今は移動中です」

「オツケー、バッチリよ。それじゃあ舞ちゃん、手はずは大丈夫？」

「はい。まず、潜伏できる場所は限られているから、米原さんがモヤを直接見て霊質を辿って場所の見当をつける」

「そう。そのあたりに足の速い所長が向かって場所を特定、いぶり出す」

所長がバイクに積んだ各種法具で霊域を隔離、霊気を維持できなくなる前に霊は飛び出さざるを得なくなる。

霊感のない者でも肌で感じられるほど、霊気が濃くなった。

霊枢車の走る通りは支流も支流とはいえ霊脈の通る場所だから、受肉霊の影響が強く現れたのだ。

「そのあとは、私がしばらく引き受けるんですね」

電話の声がだんだん遠くなる。

米原はいたずらっぽく笑って舞に念を押す。

「ええ。最後のイベントまでに疲れちゃダメよ？」

「大丈夫です。そんな”勿体無い”こと しませ」

急速に声が遠くなる。

声が届かなくなる前にと、最後に米原は祈る。

「それじゃ、気をつけてね」

『はい、あり　う　……』

舞は笑って遠い声で返事をする。

通話が切れた。

米原は携帯を閉じて、一息つく。

「中野くん」

「はい、分かっていますよ」

霊柩車は交差点の真ん中で停車した。

米原は少し笑って、手提げ袋を持って車を降りる。

「少し待っててね」

被串を持って車の四方に順々に立ち、被串を振る。

清めでもあり、被いでもあり、祈りでもある。

静謐な面持ちで車の周囲を歩く米原を見て、運転席に腰を据える

中野は苦笑を浮かべる。女性に護られる男というのは、なんとも、居心地が悪い。

「はい、これで平気。さ、頑張ってたね」

車に歩み寄って米原は笑う。

中野は彼女に笑顔を返して頭を下げた。

「ありがとうございます。米原さんも気をつけて」

「ありがとう。でも中野くんのほうが危ないんだから、気をつけてね？」

「はい」

中野は手を振り、霊柩車を発進させる。米原に見送られて、カドを曲がった。

次の交差点で、垂直に交わるようにバイクと行き違う。

霊柩車に気づいた所長はもう一度片手を振り”幸運を祈る”と合図をして消えていった。

中野は苦笑を浮かべる。

「さて、仕事はしっかりやらんといかんな」

ハンドルを握りなおし、アクセルをちょっと強く踏んだ。

交通安全のお守りが揺れる。

舞は交戦していた。

いつか戦った受肉霊の振るう腕を柄でいなし、地面を蹴って間合いを取る。槍を回して半身に構えた。

「うん、好調」

自分の調子を確認めるように頷いて、舞は微笑んだ。

ギョロリと向く受肉霊の瞳も、触れるだけでかぶれてきそうな冷たい霊気も、今の舞には気にならない。

様子を見るようにたたずむ受肉霊に気がついて、舞は穂先をほんの少し持ち上げた。

「どうしたの？ おいでよ。逃げたら貫くよ」

もっとも、貫いて勝てるわけではないが。

受肉霊は挑発に反応したように踏み込み、飛び掛ってくる。武術も何もない身体能力に任せきった動き。

舞はあっけないほど簡単にかわし、穂先でえぐるように二の腕を刺した。ダンスのステップを踏みかえるように受肉霊の背後に回る。

「おっと」

元葬儀屋の霊だけあって、霊気の扱いには長けていた。

湧き出したもやの塊に足を捕らえられそうになり、舞は小さく飛んで足元を薙ぎ、袂う。

着地と同時に跳躍し、受肉霊を蹴り飛ばした。追い討ちのように鋭く回した石突で受肉霊を打ち伏せ、吹っ飛ばされた受肉霊は二箇所に与えられた運動エネルギーのモーメントとして、アスファルトのうえを跳ねて転がる。

「このまま斬って被えたら楽なんだけどねー。受肉霊ってホントめんどうかい」

舞は大げさに肩をすくめて両手を広げる。

首をかしげ、口もとに笑みさえ浮かべて舞は言った。

「ねえ、そう思わない？」 医者”さん”

受肉霊の動きが止まった。

舞は笑みを深める。

「私もね、”この状態”になって感覚が深まったから理解できたけ

どさ。考えてみれば当たり前の話よ」

歩み寄りながら芝居がかった身振り受肉霊を指差す。

受肉霊は髪を振り乱し、飛び掛ってくるが、舞は片手間のように槍を振って受け流し逆に叩き伏せる。

倒れた体を強引に動かし距離を取った受肉霊を見ながら、舞は平然と言葉を続けた。

「受肉に使われた死体が見当たらなかったのは、医者さんの”生きた体”を使っているから。当たり前の話ね。こうすることで、受肉霊の霊気が現れたり消えたりしたことに説明がつく」

弱い死霊では、生者に取り憑くことは出来ない。しかし、当人が受け入れるのなら話は別だ。

槍を肩に担いで、ぴっと人差し指を上げた。

「死体を見つけるのは手間でも、自分の体が該当するなら使えばいい。だいたい、受肉は死体でなきゃできないなんて決まりはないわ。強い霊気が生者に影響を与えるのは、ひいては霊気が生者に干渉できることを表しているもの。自ら受け入れるのなら、なおさら、問題ない」

人差し指を左右に振る。

舞は笑った。

「生きた人間に霊気が取り付くことが出来るっていうのは、私が証明してるもの」

自らの腹を撫でる。顔をうつむけて、頬を上気させた。

その喪服のしたには、生々しい傷跡が隠されている。

「私はね、一度死に掛けたの。この槍に貫かれて」

うつとりとしているような調子で、聞いているかも定かではない受肉霊に向かつて滔々と言葉を連ねた。

「すぐに治療を受けて一命は取り留めたんだけど、私の魂は棺おけに片足突っ込んだまま」

槍を愛おしそうになでて、振るい、構える。

ただ構え、振るい、斬って突くだけで幸せだというように、蕩けそうなほどの極上の笑みを見せた。

「私は死者であり生霊であり生者であり、受肉霊なの。霊気も放てるし、体も強いし、私の命を半分奪ったこの槍と、魂を分けている。それでも私は生きているの」

じり、と靴を鳴らして足を滑らせる。

体重を乗せる。重心を落とす。肩の力を抜く。腰に力をためる。構えを取る。

「この感覚は、分からないでしょうね。たまらないわよ。命が溢れてくる。指が震えるほど、膝が笑うほど、腰が砕けそうになるほどに。強く強く、”生きている”の」

踏み切った。

間合いを一瞬で詰めて、石突で受肉霊の顎をかち上げる。

膝を叩き込み、柄で殴り飛ばす。体が離れたところを、穂先を滑らせるように袈裟に切りつける。振り切った勢いを使って後ろ回し蹴りを放ち、受肉霊を吹き飛ばす。

「うあつ、アああああ！！」

受肉霊は地面を舐めた後、背を向けて逃げ出した。

舞の、生きた受肉霊という常識外の霊気に向かつていく気概を失ったのだ。人とながり、歴史を作り、今を生きる、それだけの力を持つ生という霊気ちからは、過去にしがみつくための霊気ちからしか持たない”ただの”受肉霊の比ではない。

「うああアつ！？」

しかし、道路から逸れようとしたときに見えない壁のようなものにぶつかって動けなかった。

舞はからからと笑う。

「逃げようとしても無駄。米原さんが霊脈に沿って結界を張ってるもの。あなたが霊気を持つ限り、逃げ出せないわ」

怯えたように舞を振り返った受肉霊は、道路に沿って、道路と同じ路みちを流れる霊脈に沿って走り出す。

舞は満足げに目を細めて受肉霊を見送った。

受肉霊が持ち前の身体能力で駆け抜けていくと、交差点を超えてすぐの道路の真ん中に霊枢車が停まっていた。その霊枢車の、本来なら棺を入れるべき後部を開け放って喪服の男が腰掛けている。

煙草を吸っている彼は、受肉霊に気がつくくと手に持つ黒い塊を持ち上げる。その先端を受肉霊に向けた。

マズルフラッシュ。

銃声が響き、受肉霊の体を衝撃が襲う。

大口径のライフル銃だった。男はすぐに弾をこめ直し、再び撃つ

てくる。

肉体を持つ受肉霊は、銃の飾り程度の紙垂や札の除霊効果以上に直接的なダメージが入る。受肉霊はたまらず交差点を曲がって駆け出した。

幸いにも、そちらにも霊脈が流れていたために結界は張られていなかった。

ふたたび走っていると、丁字路で今度はバイクに乗った男が右手で印を結んで左手で水を撒いている。

周囲に張られている結界と結びつき、強固なものに変貌していた。普通ならば貫くのも造作もないだろうが、こうなってしまうては破るのに時間が掛かる。

そして時間を掛けてしまえば、背後の巨大な霊気を持つ受肉した生霊^モに追いつかれるかもしれない。

受肉霊が霊脈に沿って再び角を曲がることを選択するのに、長い時間は掛からなかった。

やがて走っていくと、大通りに出た。しばらく走ると駅前の大きな十字路にたどりつく。そこには女が立っていた。

巫女服を着た彼女は受肉霊を見ると、微笑む。

「いらっしやい」

受肉霊が交差点に踏み込むのを見て、被串を左右に振る。

交差点の四方に立てられていた大幣^{おおぬい}がにわかに米原の力を受けて結界として作用する。

そして、

「鳥かごのなかへ」

受肉霊は隔離された。

かつかつ、と靴がアスファルトを噛む音が規則的に響く。

「覚えてる？ あんたが最初にいた場所」

受肉霊が振り返ると、そこには髪をツインテールに縛り、槍を抱えた喪服姿の少女がゆったりと歩いてきていた。

最初からこの場所を知っていて、真っ直ぐにここに向かっていったかのように。

「あの日のあの山ってさ。月や星のめぐりの力を受けていて、いくつも弱い霊脈が重なっている」一番霊脈の濃い場所”だったのよ”

米原と一瞬だけ目を合わせ、わずかに空けられた結界の穴を潜り抜けて交差点に入ってくる。

行き場をなくした受肉霊の霧のような霊気が溜まっている結界内だが、舞の周りだけが彼女の霊気に押し流されて霧がなくなっていた。

舞は、そんなむき出しのアスファルトを指差す。

「今日はその場所がここ。あんたが受肉するうえで安定できる場所であるように、私たちが霊気を被う上で一番やりやすいのもここなのよ」

「う、あア……」

受肉霊は立ち尽くす。

舞はつかつかと歩み寄りながら、億劫そうに首を振った。

「あんたが憑依して受肉するんでなければ、簡単に貫いて被うこともできたんだけど。ま、死体がボロボロになるから、あとで受肉に

使った死体も弔わなきゃいけない葬儀屋としてはそんなことは避けたいんだろっけどさ」

「あ、アああア……」

受肉霊はうめく。

舞は歩み寄りながら、肩をすくめ、具合を確かめるように片手で槍を振る。

「私はあくまで霊気を解放して戦える仕事が欲しかっただけだし、あんまり関心ないんだけどね」

「ああアああア……！」

「だからさ」

全くの自然体で手を滑らせるように両手で握り、槍がくるりと回って、収まるべき場所に落ち着くようかのようにはびたりと止まる。槍を構えた。

「うああアああアああアあつ……！」

「葬儀を執り行おうか。 しめやかに、ね」

舞は笑う。

8th program サソイサソウ（後書き）

最終局面です。

舞の正体は伏線になってたりそうでもなかったり。医者の方も割りとは適当だったりそうでもなかったり。

戦闘のキーポイントは旧来霊的な力の強い「辻」に設定してみたり、そうかと思えば場面によっては超適当に誤魔化してみたり。

いずれにせよ、全ては戦いに収束しました。あとはパツと一花、炸裂するだけです。

次回、最終話。

final program オドレオドレ

舞は地面を蹴った。飛び掛ってきた受肉霊と正面からぶつかるように激突し、柄で薙ぎ払う。

足下、湧き出したもやが形を取って掴みかかってくる。石突を突き下ろして核を精確に潰した。

背後からも湧き出し襲い掛かってくる。舞は滑るように足を半歩前に出し、槍をふるって薙ぎ払う。

「ああアアア！」

受肉霊が間合いを詰めてきて腕を振り下ろした。鉄さえ潰せそうな強力を、舞は柄で受け止める。

わずかにきしむ槍を傾け、受肉霊の力を受け流すと腰をひねって蹴り飛ばし、お互いに距離を取った。

しかし受肉霊は腕を広げてもやを集め、砲弾のように打ち出した。一抱えもあるその弾丸を舞は正面から唐竹割りに切り下ろす。同時に周囲に湧き出したもやを見もせず把握すると、アスファルトを軽く蹴った。

一転、切り下ろした勢いを使って縦に一回転し、背後のもやを切り上げる。そのまま着地と同時に大きく斜めに切り払い、周囲のもやを抜った。そしてサイドステップを踏む。

舞が立っていた場所でもやが着弾し吹き散らされた。

「なかなか、手応えがある相手ね」

嬉しそくに目を細める。

舞踏を踊るように、舞は軽いステップで受肉霊との間合いを詰めた。遅れ髪が宙に踊る。

受肉霊は学習しているのか、槍穂の間合いに入らないように、逆に大きく前進し距離を縮めた。接近戦になると不利なのは舞だ。受肉霊が腕を振るう。

舞はそれをジャンプでかわした。高く跳び、足を上げて受肉霊の手をかわす。舞を見上げようと首を動かし始めたその背中に、杭のように重く強く石突を落とした。

体勢を崩す受肉霊と裏腹に、ひらりと飛び越えて着地する舞。その舞を狙ってもやが湧き出して襲ってくる。

今度は時間差をつけているが、舞の目に迷いはない。

「っふ！」

槍を突き、一体を吹き散らす。槍に引き寄せられるかのように踏み込み、襲い掛かるもやをかわす。

「ひゅ！」

背後にそれを残したまま眼前に襲い掛かるもやをまず斬り、袂う。

「はあっ！」

振り返りざまに薙ぎ、背後で体勢を整えたもやを袂った。直後に槍がうねるかのように石突が跳ね上がり左側にいたもやの顔面を殴り飛ばす。

「せっ！」

その反動で槍が踊り、右側のもやと左側のもやを一振りで袂う。

斬り、突き、薙ぎ、石突で殴られ手足で翻弄され、一方的にあしらわれ袂われるだけだった。そしてそのたびに受肉霊の霊気は目減

りする。

どれだけ数を増やしても舞にとっては兎戯に等しかった。

「ああああっ！！！」

起き上がった受肉霊が自ら腕を振るっても、柄で受けられる。舞は即座に足を振り上げて受肉霊の腹に蹴りを叩き込む。同時に脇を締め、腕を引き絞り、槍の石突で受肉霊の側頭部を殴り飛ばす。きりもみに回りながら吹き飛んだ受肉霊は、地面に腕を叩きつけて回転を殺し、受身を取るように転がって立ち上がる。

舞はそこに踏み込む。

「うああ！！！」

受肉霊が迎撃するように拳を突き出す。舞は浅く持った石突をその拳に横様にぶち当てていなし、同時に穂先を構える。刃が踊るように跳ね上がり、逆袈裟に受肉霊の体を切り上げた。

刃は受肉霊を斬っても、霊力で強化されたその身体は硬く切り傷よりも衝撃として伝わる。切りつけられた受肉霊は、浅い傷とともに斬撃の勢いで体勢が崩れる。

「はっ！」

一歩足を引いた舞は槍を構え直し、上段から袈裟に斬りかかる。腕を掲げて盾にすることで防いだ受肉霊は、足を振り上げて回し蹴りを浴びせる。

「あああああ！」

「っふ」

短い呼吸を残して舞は、たん、と軽いステップを踏む。

その一歩で間合いを広げ、受肉霊の蹴りから離れた。直後に跳ね返るかのようになさく鋭く跳躍して大上段から真っ直ぐ、唐竹割りに槍を振り下ろす。

蹴りを空振りして体勢の崩れた受肉霊はかるうじて転がるようにその斬撃を避ける。舞は足を踏み変えて刺突を閃かせる。受肉霊に当たった刃をわざと跳ねさせ、槍を引き戻す動作に合わせて斜めに引き斬る。

受肉霊が悲鳴を上げ、白く煙を立ち上らせながら傷口を霊力で塞ぐ。そのたびにまた、霊力は減っていった。

もはや、趨勢は喫した。

いや、最初から決まっていたのかもしれない。

「っし！」

舞が鋭く声を上げて大きく槍を振るい、受肉霊の横腹に叩きつけた。衝撃に吹き飛び、地面を転がる。

もがきながら立ち上がる受肉霊の前に踏み込み、槍を回し、構える。

「これで、お終い！」

その胸に槍を突き立てた。

誰もいないバス停のベンチに腰を下ろしている舞の後ろに、霊柩車が停まった。

ドアが開いて誰かが下りる音の後に、ボタン、と閉じる音。
舞の横に中野の顔が現れた。

「よう。お疲れ、舞」

「……よう」

舞は億劫に振り返り、表情の薄い顔で返した。

中野はベンチを乗り越え、舞の隣に座る。スポーツドリンクを手渡しながら笑った。

「また気が抜けてるのか。でかい山のあとはいつもそうだな」

「まあね……」

返事にいつもの張りが無い。黙ってペットボトルを傾ける舞を見て中野は苦笑する。

舞は自分の本来の姿といえる霊気を開放する状態になると、異常なほどの躁状態になるとともに霊気を撒き散らす。周囲に満たすことで戦闘が有利になることもあるが、それ以上に自分自身がそのほうが快感があるのだという。

しかし、霊気とはもとは自分の魂である。

生者である限り日々の生活のなかですぐに回復していくとはいえず、再封印の副作用で大幅に減った直後はどうしようもない。舞にとつて気が抜けるというのは字義通りの意味なのである。

ペットボトルを膝の上に載せた舞は、首を傾けて口を開いた。

「米原さんたちは？」

「所長は医者の手当てと警察が来るまでの拘留。米原さんは残留してる霊気を抜ってるのと、霊脈をいじった後処理」

「そっか」

あの医者に憑依していた死霊が抜われたのだから、死霊の靈気による体型の変化も付随する異常な筋力もなくなり、ただの人間に戻っている。

しかるのちに、彼は傷害や殺人未遂で法に問われることだろう。受肉の罪は重いが、法に規定されておらず、別の法を適用して処罰することが慣例になっている。

だがそれは、葬儀屋には、もう関係のない話だ。

ベンチの後ろに手を突き、空を仰ぐように仰け反って中野は言葉を重ねる。

「この戦いが終わったんだから、お前、好きな奴に告白してきたらどうだ？」

「……あれ、私あなたに好きな人いること言っただけ」

からかいに返る言葉は、なんとも気の抜けるものだった。
中野は苦笑して、うなづく。

「まあな。別の、でかい山のとくに」

「……そうだった」

ツインテールを傾けて舞はつぶやき、膝に肘を乗せた。
思い出したように中野に言い返す。

「あんただって、終わったんだから米原さんに告白してくれば？」

「俺はいいんだよ、別に死亡フラグ乗り越えたわけじゃねえんだか

ら

「ああ、そう」

気のない声であっさり返す。

両手でペットボトルを回して遊ぶ舞に中野が苦笑していると、米

原が歩いてきた。中野が米原を見たことに気づき、手を振る。前に立った米原はふたりを見比べて、微笑む。

「それじゃあ、私たちは帰りましょうか」

中野はうなずいて立ち上がり、ふと気がついたように尋ねた。

「所長は？」

「院長さんに依頼達成の報告と、警察から佐藤美由紀さん殺害の重要参考人として聴取するって連絡受けたから、その確保。あとは霊気の影響が残ってる場所がないか見回りしてくるって」

「そうですか、分かりました」

米原の言葉に、中野はさしたる反応を見せずにつなずいた。

舞を気遣いながら連れ立って霊柩車に乗り込む。中野は最後に運転席に乗り、キーを回した。

エンジンが震える。

走り出す前に、不意に、窓の外を見た。

そこにはもはや霊気もなにも残っていない、人通りも戻らないがらんどうの交差点がある。

中野は無表情なアスファルトを眺めて、つぶやいた。

「……なんか、物寂しいですね」

助手席に座る米原は、首をかしげた。髪がさらりと肩からこぼれる。

優しく穏やかな微笑を浮かべ、そつと中野に答える。

「葬儀って、そういうものよ」

「そつかもしれません」

小さく笑って中野は顔を戻した。
ギアを入れてハンドルの切り、Uターンし、走り出す。
交通安全のお守りが揺れた。

「ねえ、これ」

米原がそのお守りを見つめながら、嬉しそうに笑った。

「これって、私が作ってあげたお守りでしょ？ 大事に使ってくれるのね」

「米原さんの力は知ってるので、下手な神社の物より信頼できますよ」

「ふふ、そんなふうに言ってもらえると嬉しいわ」

霊柩車が交差点を出る。

車とすれ違った。

しばらくルームミラーを見つめていた米原は、かすかに微笑んで中野を見る。

「ねえ、中野くん」

「はい？」

信号待ちをするために停まり、人がわたるのを眺める中野が聞き返した。

米原は後部座席でいつの間にか寝息を立てている舞を振り返りながら言う。

「さっき、ちょっと聞こえちゃったんだけど」

信号が変わり、霊柩車は走り出す。
運転する中野の横顔を眺めながら、米原は言葉を重ねた。

「戦いが終わったら、私になにか言っただけですって？」

元タクシードライバーの意地に掛けて、安全運転は崩さなかった。
中野が振り返った米原の頬は、ほんのわずかに、桃色に見える。

§

遠くで、ざわざわと木々がざざめいている。

夜も深まった深夜二時過ぎ。ひと気の全くない深夜の住宅街に白
いもやがたたずんでいた。霧のような、煙のようなそれは、風に流
されることもなくその十字路に留まっている。

ざり、と靴がアスファルトを噛む音が聞こえた。もやが振り返る
ようにその場で流れる。

「どうもこんばんわ。あなたを弔いに来たわ」

少女の声でもやに話しかける。

穂先に朱墨で文字の書かれた札を貼り付けている槍を肩に担ぎ、
右手で肩に掛かるツインテールを払う。

小柄で女子高生くらいの年齢の彼女は、パンツスーツの黒い喪服
を身にまとっていた。

その喪服は体に馴染んでいるように形が変わっており、日常的に
身にまとっていることを感じさせる。

もやが動き出す機先に合わせて、少女はゆらりと動いた。石突が
跳ね上がるように回り、一瞬で槍を構える。

舞は微笑んで、歌うように言った。

「それじゃあ、葬儀を執り行いましょう。しめやかにね」

葬儀とは、残された人のために亡くなった人を送る儀式。

そこにはどこか、寂しさと悲しさと、生きる強さに満ちている。

final program オドレオドレ(後書き)

ひとつの葬儀屋の物語、これにて終幕にございます。
皆々様におきましては、楽しい時間を過ごされたのなら、至極幸
いに思います。

最後の最後に、年の差恋愛を混ぜ込んでみたり。

舞の日常、舞の好きなひと、6年前の事件、中野がわざわざ除外
した”あの件”……まだまだ物語りは続きます。

しかしそれはきつと、私の手によるものではないでしょう。

読んだあなたが、ふと彼らの姿に思いをはせたとき、彼らの物語
は紡がれるのだと思います。

それはあるいは、彼らだけではないかもしれません。

すべてはあなたの中に。

今を生きるあなたの、その”力”によって創られるのです。

と、なんかカッコいいことを言ってみました。

話を思い返してみても、という話です。

気に入ってもらえたら、彼ら『葬儀屋』の過去現在未来に想像を
広げてみて、という話です。

この世界観を下敷きにして誰か書いて、という話でも(殴

えー、まー、とりあえず、この物語は以上です。

ロマン重視、好き勝手に書いた物語が、一人でも多くのひとの心
を楽しませることができたなら最高です。

ありがとうございます。

また別の物語であいまみえることを願って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0049k/>

踊る葬儀屋

2010年10月10日04時51分発行